10『まつさをな』成井豊＋真柴あずき

○ジャンル／時代劇

○ストーリー／嘉永５年（１８５２年）４月、小田原藩士・青柳啓一郎は、友人たちと旅芸人の一座へ行く。舞台に現れたのは、目隠しをして剣を振る娘・千鶴。千鶴の顔は、一年前に病で亡くなった姉に瓜二つだった。啓一郎は、父・徳右衛門に進言して、千鶴を青柳家の養女として引き取ることに。千鶴はいきなり武家の娘となって、戸惑うばかり。しかし、自分を引き取ろうと言い出したのが啓一郎だと知り、ひそかに思いを寄せ始める……。

○出演者／男８＋女５＝計１３

○上演時間／１２０分

登場人物

千鶴（菊池一座の芸人）

青柳啓一郎（小田原藩士）

宇佐見静馬（啓一郎の友人・小田原藩士）

岩本鉄之助（啓一郎の友人・小田原藩士）

青柳徳右衛門（啓一郎の父・小田原藩次席家老）

満寿江（啓一郎の母）

りく（青柳家の女中）

大橋忠兵衛（青柳家の家臣）

春衣（静馬の妹）

栗栖勝太郎（啓一郎の友人・道場主）

菊池鯉之丞（菊池一座の親方）

竜蔵
すずめ

（菊池一座の芸人）
（菊池一座の芸人）

嘉永五年四月一日夜。啓一郎がやってくる。正面に向かって、語り始める。

啓一郎　父上。私は今日、思いがけない拾い物に出会いました。と言っても、今、それをお目にかけることはできません。どうか、ご覧になる機会を作っていただければ。一目でも見ていただければ、私が拾い物と言った意味が、おわかりになると思います。ことの起こりは、鉄之助です。鉄之助が、私と静馬を、海音寺の境内へ行こうと誘い出しました。そこで、旅芸人の一座が、掛け小屋を出していると言うのです。

海音寺の境内。静馬と鉄之助がやってくる。

静馬　鉄之助、俺はやっぱりやめておく。

鉄之助　どうして。

静馬　どうせ、くだらん見世物だろう。ろくろ首とか、いかさま手妻とか。

鉄之助　違う違う。小屋の前の看板に、でっかく書いてあったんだよ。「剣の達人・美浪太夫」って。キレイな女子が、剣を振り回してる絵もあった。

啓一郎　へえ。女子で、剣の達人か。

鉄之助　おもしろそうだろう？　どうせ二十文ぽっちだ、話の種に見ていこうぜ。

静馬　おまえは昔からそうだ。何か珍しい物があると、必ず首を突っ込んで。
鉄之助　いいから付き合えって。三人で出かけるのも、久しぶりなんだし。

三人が歩き出す。菊池一座の掛け小屋。舞台に鯉之丞がやってくる。

鯉之丞　高い所から御免をこうむり、口上を持って申し上げまする。最後に小田原の皆様にお目にかけますのは、当菊池一座が誇る剣の達人、美浪太夫にございます。

舞台に、すずめに手を引かれて、目隠しをした千鶴がやってくる。腰に大刀。客席の後ろに、啓一郎・静馬・鉄之助が並んで立つ。

静馬　何だ、あれが達人か？　まだ小娘じゃないか。
鉄之助　まあまあ。おとなしく見てようぜ。

舞台に、同じく大刀を腰に帯びた竜蔵がやってくる。刀を抜き、千鶴に向ける。

鯉之丞　さて、お立ち会い。ただ今より、こちらの男が、目隠しをしたままの美浪太夫に、真剣にて斬りかかります。太夫が、無事に刃をかいくぐれますかどうか、しかとご覧くださいませ。
すずめ　始め！

竜蔵が千鶴に斬りかかる。千鶴が避けて、二人が入れ替わる。

鉄之助　うわ、危ねえ。

竜蔵が千鶴に斬りかかる。千鶴が刀を抜き、竜蔵の刀を受け流す。竜蔵は違う位置から、何度も千鶴に斬りかかる。千鶴は竜蔵の刀を次々と避ける。

啓一郎　すごいな。まるで見えてるみたいだ。

鉄之助　感心するのはまだ早いぞ。（舞台に向かって）おい、太夫！　その目隠し、怪しいぞ！　本当は透けて見えてるんじゃないのか！

静馬　おい、やめろ。

千鶴が目隠しを外し、客席を見る。

千鶴　今、妙なことを仰ったのはどちらさんで？

鉄之助　（手を挙げて）俺だ、俺。

千鶴　この目隠しが、気に入らないって言うんですか？

鉄之助　ああ、そうだ。薄っぺらい布なら、見えて当然だからな。

千鶴　小田原の男ってのは、みんなあんたみたいに疑り深いんですか。

竜蔵　太夫、相手はお侍だぞ。

千鶴　憚り様。侍だろうがお公家だろうが、芸に文句をつけられちゃ黙ってられないね。（布を鉄之助に投げて）気が済むまで、確かめてもらいましょうか。

鯉之丞　（鉄之助に）すみませんね、旦那。誠に気の強い女子でして。

鉄之助　（布を頭上にかざすなどして）ふーん、なるほどね。

静馬　どうなんだ、鉄之助。
鉄之助　正真正銘、分厚い布だ。これじゃ何も見えない。太夫、疑って悪かったな。
千鶴　謝って済むなら、奉行所はいらないんじゃないですかね。
鉄之助　済まん、この通りだ。お詫びにもう二十文、こいつが払うから勘弁してくれ。
（と啓一郎の肩を叩く）
啓一郎　何で俺が。
鉄之助　持ち合わせがないんだよ。今度、埋め合わせはするから。
鯉之丞　とんでもない。決まった木戸銭以上のお足をいただくわけにはいきません。
鉄之助　しかし、それじゃ俺の気が済まない。
鯉之丞　そうですか？　じゃ、すみませんね、旦那。（と啓一郎に手を出す）
啓一郎　仕方ないな。

啓一郎が財布から小銭を出して、鯉之丞に渡す。鯉之丞・竜蔵・すずめが「毎度ありがとうございます」と声を揃えて言う。啓一郎が千鶴を見つめる。千鶴が啓一郎を見る。

千鶴　まだ何か文句があるんですか？
啓一郎　いや、迷惑をかけて申し訳ない。
鯉之丞　お集まりの皆様。お武家様も認められた美浪太夫の腕前、どうぞ再び、ご覧くださいますよう。本日は、これにてお開きとさせていただきます。またのお越しを、心よりお待ちいたしております。

千鶴・鯉之丞・竜蔵・すずめが一礼して去る。掛け小屋の外。

静馬　なかなかの腕前だったな。小娘だと思って馬鹿にしていたが。

鉄之助　甘いぞ、静馬。あれぐらい、段取りさえ決まってれば、目をつぶってたってできるだろう。

静馬　おまえが声をかけた時はどうだ。相手をしていた男は、おまえの声に驚いて太刀筋が揺れた。なのに美浪太夫は、見事にかわしたぞ。なあ、啓一郎。

啓一郎　（掛け小屋を見ている）

鉄之助　どうした、ボーッとして。まさか、あの太夫に惚れたのか？

静馬　おまえは何とも思わなかったのか？　太夫の顔を見て。

鉄之助　看板の絵の方が、キレイだったかな。

静馬　よく思い出してみろ。どことなく、季江さんに面影が似てただろう。

鉄之助　季江さんに？　言われてみれば、そんな気もするな。

啓一郎　いや、よく似ていた。弟の俺が言うんだから確かだ。

鉄之助　でも、季江さんは、あんなに鼻っ柱が強くなかったぞ。

静馬　当たり前だ。いくら似てても、違う人間なんだから。

静馬と鉄之助が去る。

啓一郎　剣を振っていた女子は、驚くほど姉上に似ていました。静馬の言う通り、全くの別人ではありますが。そうです。その女子こそが、私の拾い物です。一座はこれから一月、同じ場所にいるそうです。父上にも、是非、確かめていただきたいのです。

啓一郎が去る。

嘉永五年五月一日昼。菊池一座の掛け小屋の楽屋。竜蔵がやってきて、横になる。そこへ、千鶴とすずめがやってくる。それぞれ行李を抱えている。

千鶴　何やってんのさ、竜蔵。さっさと荷造りしなよ。
竜蔵　俺の分は、とっくに終わったんだ。おまえらと違って、手際がいいからな。
すずめ　だったら手伝って。いつも自分のことしかやらないんだから。
竜蔵　何だと？　おまえ、いつから俺に指図できる立場になったんだ？
千鶴　喧嘩は後。夕方には出発なんだよ。頼むから手伝って。
竜蔵　しょうがねえな。（すずめに）で、何やりゃいいんだ？
すずめ　これ、表に持っていって。（と持っていた行李を渡す）
竜蔵　（受け取り、そのまま床に膝をついて）重てえ。何が入ってやがんだ？
すずめ　石とか、岩とか、お地蔵さんとか。
竜蔵　おまえが舞台で持ち上げてるヤツか。力自慢だけじゃなくて、そろそろ本気で剣術をやれよ。
千鶴　すずめちゃんは真面目に稽古してるよ。あんたこそ、もっと腕を磨いたら？
竜蔵　昨日も居合抜きで、竹を斬りそこなったよね。小田原最後の舞台なのにさ。うるせえ。あれはたまたま、竹が固かったんだよ。

そこへ、鯉之丞に案内されて、忠兵衛がやってくる。

鯉之丞　静かにしろ、竜蔵。大事なお客さんが来てるんだぞ。
竜蔵　何で俺だけ怒られるんだ？
鯉之丞　千鶴。この方は、おまえを訪ねていらしたんだ。
千鶴　私を？
忠兵衛　（千鶴を見つめて）あなたが千鶴殿ですか。なるほど。聞いていた通りだ。
竜蔵　何なんだ、あんた。いきなり千鶴をいやらしい目つきで見やがって。
鯉之丞　引っ込んでろ。（忠兵衛に）すみませんね、躾が行き届いておりませんで。
千鶴　（忠兵衛に）それで、私に何の用なんです？
忠兵衛　某は小田原藩次席家老、青柳徳右衛門様の家臣、大橋忠兵衛と申します。本日は青柳様のご要望で、あなたをご養女としてお迎えに上がりました。
千鶴　は？
鯉之丞　喜べ、千鶴。大出世だぞ。ご家老様のご息女になれるんだぞ。
すずめ　本当に？　すごいじゃない、千鶴姉ちゃん。
千鶴　（忠兵衛に）でも、どうして私なんかを。
忠兵衛　青柳様は、お忍びであなたの舞台をご覧になりまして。一目で気に入られたというわけです。
竜蔵　千鶴、騙されるな。芸人を娘にする物好きがいると思うか？　大方、養女ってのは表向き。本当は、スケベ爺のお妾にされちまうんだよ。
忠兵衛　無礼なことを申すな。青柳様は、スケベ爺などではない。
竜蔵　嘘だ。あんたも、見かけは真面目そうだが、相当なスケベだろう。
千鶴　やめなよ、竜蔵。まだ話が途中なんだから。（忠兵衛に）説明してもらえま

忠兵衛　すか。一体、私のどこが気に入ったのか。

では、簡単に。一年前、青柳様のご息女・季江様が、嫁ぎ先で亡くなられました。もともとお体が強い方ではなかったのですが、たちの悪い風邪を引かれて、あっという間に。青柳様も奥様の満寿江様も、それはお力を落とされて。あなたは、その季江様に、とてもよく似ているのです。

すずめ　つまり、その人の代わりに、千鶴姉ちゃんを娘にしたいってことですか？

鯉之丞　（千鶴に）ありがたい話じゃないか。芸人に身を落としたおまえを、元の武家暮らしに戻してくださるんだ。お受けしないと罰が当たるぞ。

忠兵衛　今、何と言った？　元の、とはどういう意味だ。

鯉之丞　千鶴はもともと、侍の娘だったんです。侍と言っても、浪人ですが。

忠兵衛　それがなぜ一座に入ったのだ。

鯉之丞　私たちが武州を旅していた時、同じ宿に千鶴と父親も泊まっていたんです。父親は肺を患っていて、もう長くはなさそうでした。うちにも、肺をやられて死んだのがいたんで、他人事とは思えませんで。短い間ですが、できるだけの世話をしたところ、千鶴を引き取ってくれと頼まれました。乗りかかった船です、すぐに承知しましたよ。それから間もなく、父親は亡くなりました。今から十年も前の話です。

竜蔵　親方も、十年前は親切だったんだな。

すずめ　（口に指を当てて）シーッ。

忠兵衛　（鯉之丞に）よくわかった。青柳様にも、しかとお伝える。千鶴殿が武家のお生まれとお聞きになったら、ますますお喜びになるだろう。

鯉之丞　千鶴、支度をしろ。

千鶴　待って、親方。私は受けるなんて言ってないよ。

鯉之丞　馬鹿野郎。ご家老のご要望だぞ。おまえは断れる身分じゃないんだ。
千鶴　いきなり知らない人の娘になれって言われても困る。
竜蔵　そうだそうだ。第一、千鶴が抜けたら、一座だって困る。
鯉之丞　別に困りゃしねえ。残った人間でやっていくだけだ。
すずめ　私、もっと頑張るよ。千鶴姉ちゃんの分まで。
竜蔵　おまえ、千鶴がいなくなってもいいのか？
すずめ　だって、相手はご家老だよ。ここにいるより、ずっといい暮らしができるんだよ。（千鶴に）断ったりしちゃ駄目だよ、絶対に。
千鶴　でも……。
鯉之丞　芸人のままで一生を終える気か？　それで父上が満足すると思うのか？　おまえを手放す時、どんなに心残りだったか、考えてみろ。本当は、大事な娘を芸人なんかにしたくなかったはずだ。
千鶴　そんなことない。親方が引き取ってくれなかったら、私も野垂れ死にしてた。
鯉之丞　勘違いするなよ。たまたまおまえに見所があったから、面倒を見てやっただけだ。そうじゃなかったら、とっくに放り出してたさ。この話を受けねえと言うなら、おまえとは縁を切る。どこへでも好きなところへ行っちまえ。
竜蔵　そんなに千鶴を追い出してえのか？
鯉之丞　文句があるなら、おまえも出てけ。
竜蔵　望むところだ。千鶴、二人でここを出よう。
千鶴　無理しないでよ、竜蔵。（忠兵衛に）少しだけ待ってください。荷物をまとめてきますんで。
忠兵衛　いいんですか？　もうちょっと、考えてからでも構いませんよ。
千鶴　大丈夫です。

千鶴が去る。

竜蔵　待てよ、千鶴。（と、後を追おうとする）

鯉之丞　竜蔵、おまえは荷造りをしろ。

忠兵衛　本当によかったんでしょうか？　何だか、無理強いをしたみたいで。

鯉之丞　気にしないでください。千鶴の支度ができるまで、お茶でもいかがです？

すずめ　すずめ、一番いいのを入れろ。

忠兵衛　（忠兵衛に）お姉ちゃんのこと、よろしくお願いします。

承知いたしました。

忠兵衛・鯉之丞・すずめが去る。竜蔵が行李を持って去る。

嘉永五年五月一日夕。青柳家。徳右衛門がやってくる。反対側から、りくがやってくる。

りく　まあ、旦那様。ずいぶん早いお帰りですね。

徳右衛門　今日は、特別な日だからな。じっとしていられなくて、早退けしてきた。啓一郎はまだか。例のあれは、もう着いたか。満寿江には会ったのか。

りく　全部、まだでございます。そんなに慌てなくても、ようございましたのに。

徳右衛門　りく、茶を一杯くれ。走ってきたから、喉がカラカラだ。いや、その前に、満寿江の顔を見てこよう。

りく　奥様は、お休みになっておられますが。

徳右衛門　昼間、医者に行くと言ってたな。どうだった。少しはよくなったのか？

りく　お医者様のお見立ては、いつもと同じでございます。特に悪いところはない、栄養のある物を食べて、ゆっくり休めば治ると。

徳右衛門　藪医者じゃないのか。今度は違う医者に連れていけ。

りく　でも、今のお医者様で、もう五人目ですよ。二月ごとに、旦那様が変えろと仰るから。

徳右衛門　そうだったか？

りく　旦那様。今日こそは、奥様に厳しく仰ってください。お食事をしっかり取っていただかないと、治るものも治らないと。

そこへ、満寿江がやってくる。

満寿江　お帰りなさいませ、おまえ様。

徳右衛門　満寿江、寝てなくていいのか？　今朝より顔色が悪いんじゃないのか。食事はちゃんと取ったのか？

りく　お昼も、半分以上、残されました。

徳右衛門　（満寿江に）駄目じゃないか。しっかり食べないと、治るものも治らんぞ。

満寿江　ご心配をおかけして、申し訳ありません。

徳右衛門　いやいや、謝ることはない。気が進まないのに、無理に食べなくてもいい。

りく　旦那様。

そこへ、忠兵衛がやってくる。

忠兵衛　旦那様。もうお帰りになってたんですか？

徳右衛門　遅かったな、忠兵衛。例のあれはどうした。一緒じゃないのか。

忠兵衛　お連れしております。（入り口に向かって）どうぞ、お入りください。

千鶴がやってくる。無言で頭を下げる。

徳右衛門　よく来た、よく来た。さあ、もっとこっちへ。

全員が座る。

忠兵衛　（千鶴に）こちらが青柳家のご当主、徳右衛門様です。こちらが奥様の満寿江様。

徳右衛門　（千鶴に）名前は何という。年は。生まれはどこだ。

千鶴　千鶴。十七。房州の佐倉。

徳右衛門　よし、千鶴。今日からおまえは、私と満寿江の娘だ。わからないことがあったら、忠兵衛か、りくに聞けばいい。おまえの部屋は、満寿江の隣に用意した。後でりくに案内させよう。自分の家だと思って、ゆっくり寛げ。

千鶴　何だ。じゃ、本当に私はここの娘になるんですね？

徳右衛門　なぜそんなことを聞く。

千鶴　てっきり、お妾にされるんだと思ってたんで。

忠兵衛　それは誤解だと言ったでしょう。

千鶴　だって、本気で芸人を娘にするなんて、信じられなかったから。

徳右衛門　おもしろい女子だ。妾をわざわざ家に連れてくる男はいないだろう。

忠兵衛　そうですよね。妾を囲うなら、家とはなるべく遠い場所にしますよね。それに、私でしたら、もっと色っぽい女子を選びます。小唄の師匠とか。

徳右衛門　忠兵衛殿。おまえの意見は聞いてない。

忠兵衛　失礼いたしました。

忠兵衛が話している間に、満寿江が千鶴に歩み寄り、千鶴の手を握る。

満寿江　（千鶴に）ここへ来ることを、よく承知してくれましたね。ありがとう。あなたが入ってきた時は、息が止まりそうでした。あの子が帰ってきたのかと

思って。

千鶴　あの子って、季江さんのことですか？

満寿江　（頷いて）いきなり見知らぬ家へ連れてこられて、さぞ不安でしょうね。でも、あなたには決して、不自由な思いはさせません。私の命をかけて約束します。だから、私のそばにいてくださいね。

りく　奥様、お疲れではございませんか。そろそろお部屋に戻られては。

満寿江　大丈夫です。もう少し、千鶴と話をさせて。

千鶴　奥様は、どこかお悪いんで？

徳右衛門　病気というわけではないのだ。季江が亡くなってから、次第に食が細くなってしまってな。医者には、気鬱の病ではないかと言われている。

忠兵衛　（千鶴に）もともとは、活発なお方だったのですが。今はほとんど、外出もなさいません。こうして長くお話をされるのも、珍しいぐらいで。

千鶴　奥様。私は、どこにも逃げません。無理しないで、休んだらいかがですか。

満寿江　優しい子ですね、あなたは。そういうところも、季江にそっくり。

徳右衛門　（千鶴に）私は勤めが忙しい故、家を空けることも多い。りくと共に、満寿江の世話を頼むぞ。

千鶴　わかりました。旦那様。さっきは、お妾にされるなんて言って、すみません。私を娘にしてくださって、ありがとうございます。

徳右衛門　旦那様ではなく、父上と呼べ。満寿江は母上だ。いいな、満寿江。

満寿江　もちろんです。

千鶴　父上、母上。よろしくお願いします。

そこへ、啓一郎が帰ってくる。図面の束を持っている。

啓一郎　父上、やはりご帰宅でしたか。探しましたよ。
徳右衛門　どうした。工事で何かあったのか。
啓一郎　はい。西の台場ですが、図面のままだと不都合がありまして。
満寿江　啓一郎。あなたの妹が来たんですよ。お仕事の前に、ご挨拶を。
忠兵衛　（千鶴に）青柳家のご嫡男、啓一郎様です。あなたの兄上になられる方です。
千鶴　（啓一郎に）千鶴です。どうぞよろしくお願いいたします。
啓一郎　ああ。（徳右衛門に）先に父上のお部屋に行ってます。

啓一郎が去る。

千鶴　（見送って）それだけ？
徳右衛門　せっかちなヤツだな。誰に似たんだ。
満寿江　さあ。千鶴、気を悪くしないでくださいね。啓一郎は、旦那様を手伝って、台場建設の仕事をしているのです。忙しくて、ゆっくり話をする余裕がないのですよ。
千鶴　台場って、何でしたっけ。
徳右衛門　一言で言えば、海に向けて作る砲台だ。十二年前の天保十一年、清国がエゲレスに攻め込まれたことは知っているな。
千鶴　聞いたことはあります。
徳右衛門　我が日本にも、五・六年前から、エゲレスやメリケンの船が何度かやってきている。ほとんどが捕鯨船だったが、いつ、開国を迫る艦隊が来てもおかしくない。いざという時のため、海防設備の充実は一刻を争う。藩を上げて、

堅牢な台場と、精巧な大砲を作らねばならんのだ。わかるか、千鶴。

千鶴　なんとなく。

満寿江　おまえ様、啓一郎が待ちくたびれていますよ。

徳右衛門　そうだった。満寿江、夕餉まで部屋で休んでいろ。忠兵衛、千鶴のために風呂の支度をさせろ。千鶴、また会おう。

徳右衛門と忠兵衛が去る。

満寿江　（千鶴に）また夕餉の時に、ゆっくり話しましょうね。

千鶴　お部屋まで、おぶっていきましょうか？　私、結構、力持ちなんですよ。

りく　千鶴様にそのようなことをさせるわけにはいきません。奥様は、私がお連れいたしますので。

満寿江とりくが去る。千鶴が大の字になって寝転ぶ。

千鶴　ああ、肩凝った。

嘉永五年五月二日朝。青柳家。りくがやってくる。箒を持っている。

りく　千鶴様、何をしておいでです。

千鶴　（慌てて起き上がって）すみません。朝、あまりに早かったんで眠くって。

りく　女子が大の字で寝そべるなど、もってのほか。今後はお控えくださいませ。

千鶴　わかりました、気をつけます。

りく　この家の間取りは、覚えられましたか？

千鶴　何とか。昨夜、りくさんが案内してくれたおかげで。

りく　東側の建物には、藩の方々が大勢、訪ねていらっしゃいます。旦那様に、洋学の手ほどきを受けるために。夜は構いませんが、昼間は決して、この建物から出られませんように。

千鶴　どうしてですか？

りく　私の判断です。こちらの暮らしに慣れていただくまで、青柳家以外の方々には、お会いにならない方がよろしいかと。

千鶴　わかりました、気をつけます。

りく　本日から私が、千鶴様のご指導をいたします。行儀作法から掃除まで、武家の女性として、身につけるべき嗜みを習得していただきます。（箒を千鶴に渡して）まず、この部屋の掃除から始めてくださいませ。

千鶴が箒で、円を描くように床を掃く。

りく　駄目です。四角い部屋を丸く掃くのは、怠け者のすること。部屋の隅から、畳の目に沿って掃くんです。

千鶴　（力強く掃いて）こうですか？

りく　乱暴すぎます。もっと丁寧に。畳の縁は、決して踏んではいけません。

千鶴　どうしてですか？

りく　昔から、そう決まっているからです。先人の知恵です。

千鶴　本当は知らないんじゃ――――

りく　いいですか、千鶴様。作法というものは、まず覚えることが肝心です。勝手に体が動くようになるまで、理屈抜きで叩き込むんです。

そこへ、徳右衛門がやってくる。

徳右衛門　掃除をしているのか。感心、感心。

りく　お見送りいたします。（千鶴に）ここが済みましたら、隣のお部屋をお願いいたします。畳の縁は踏まないよう、お気をつけくださいませ。

徳右衛門とりくが去る。千鶴は掃き掃除を続ける。ふと思いついて、箒で素振り。

千鶴　（素振りをしながら）ませ、ませってうるさいんだよ。

千鶴が勢いよく箒を振り上げたところへ、啓一郎がやってくる。啓一郎の目の前に箒。

千鶴　すみません。（と箒を引く）

啓一郎　驚いたな。何をしてるんだ。

千鶴　りくさんに言われて掃除をしてたんですけど、急に素振りがしたくなって。一座では、毎日、稽古をしてたんで、じっとしていられなくて。

啓一郎　気持ちはわかるが、ここは一座とは違う。剣術のことは頭から追い出せ。今は他に、覚えるべきことがあるはずだ。

千鶴　承知いたしました。

啓一郎が去る。

千鶴　（見送って）何よ、あれ。いやな感じ。

嘉永五年五月十日夕。満寿江とりくが、着物と裁縫道具を持ってやってくる。

満寿江　千鶴、縫い物のお手伝いをお願いします。

りくが、千鶴から箒を受け取って去る。千鶴と満寿江は縫い物を始める。

満寿江　（千鶴の手元を見て）その調子です。かなり上手になりましたね。

千鶴　母上の教え方がうまい、いえ、お上手なんです。

満寿江　千鶴の本当の母上は、どんな方だったんですか？

千鶴　あまり覚えていないんです。私が四歳の時に亡くなったので。
満寿江　まあ。やはりご病気で？
千鶴　心の臓の発作です。その頃は、越後のあたりを旅していました。
満寿江　あなたが生まれてすぐ、父上は佐倉藩の禄を返上されたんでしたね。
千鶴　はい。仕官の道を探して、三人でいろんな土地へ行きました。ずっと貧乏暮らしで、母が亡くなったのも、着物を質屋へ持っていく途中だったんです。だから、私は臨終にも立ち合えませんでした。
満寿江　そうでしたか。それは辛かったでしょう。
千鶴　でも、父の時は、最後までそばにいられましたし。
満寿江　千鶴は、ずっと旅をしてきたんですね。十七年間、ずっと。もう、どこへも行かなくていいんですよ。私も旦那様も、あなたを本当の娘だと思っています。うんと甘えていいんです。
千鶴　ありがとうございます。

そこへ、徳右衛門がやってくる。千鶴と満寿江を見て大きく頷き、去る。
嘉永五年五月二十日昼。忠兵衛とりくが、書道の道具を持ってやってくる。

忠兵衛　千鶴様。お稽古の時刻です。

満寿江とりくが、着物と裁縫道具を持って、去る。千鶴は忠兵衛の見本を見ながら、習字を始める。勢いよく筆を動かす。

千鶴　できました。

千鶴が書いていた半紙を持ち上げる。文字が紙からはみ出している。

忠兵衛　何度申し上げても、直りませんね。この、力いっぱい書いてしまう癖は。

千鶴　すみません。筆を動かしていると、刀を振っているような気分になって。

忠兵衛　刀と筆は、全然違うでしょう。

千鶴　私は十年間、毎日、舞台に立ってたからね。この体は、刀を振るようにできてんだ。それでつい、筆も思い切り振っちまう。

忠兵衛　千鶴様、お言葉が戻っておられます。

千鶴　失礼いたしました。

忠兵衛　青柳家にいらしてから、もう二十日です。そろそろ、一座にいらしたことはお忘れください。青柳家以外の人間には、決してお話になりませんよう。

千鶴　芸人だったことは隠せってぬかす、仰るんですか。

忠兵衛　旦那様は、小田原藩の行く末を担うお仕事をなさってるんです。台場の建設だけではなく、洋式の軍備を整えるよう、殿に上申書を提出されたり、江川様の塾に出向いて、最新の砲術を会得されたり。

千鶴　誰ですか、江川様とは。

忠兵衛　伊豆韮山のお代官・江川太郎左衛門英龍様です。三年前、下田にエゲレスのマリナー号という船が入港した時、見事に撤退させた方です。その時、下田の警備についておられた旦那様も同行されたんです。幕府から特別に任命された江川様とご一緒にです。名誉なことではありませんか。千鶴様には、そういう方のご息女であるというご自覚を持っていただかねばなりません。

千鶴　わかりました。二度と一座のことは、口にいたしません。

嘉永五年五月二十五日夕。りくがやってくる。

りく　千鶴様。旦那様がお茶をご所望です。お教えした通り、お入れくださいませ。

千鶴　承知いたしました。

啓一郎と徳右衛門が、大きな図面を持ってやってくる。千鶴・りく・忠兵衛が、書道の道具を持って去る。啓一郎と徳右衛門は床に座り、図面を広げて見る。

啓一郎　これが、江川様の考案された大砲ですか。

徳右衛門　カノン砲の改良型だ。砲身を長くして、弾の飛距離を伸ばす。これが完成すれば、今までの二倍以上は飛ぶはずだ。

啓一郎　父上は、台場にこれを備えつけるおつもりですか。

徳右衛門　そうしたいが、一台作るだけでも莫大な金がかかる。頭の固い重役たちは、反対するだろうがな。

千鶴が湯呑みを載せた盆を持ってくる。

千鶴　お茶をお持ちいたしました。

徳右衛門　すまんな。そこに置いてくれ。

千鶴　（図面を見て）何ですか、これは。

千鶴が図面を見ようとして、その上にお茶をこぼしてしまう。

啓一郎　千鶴！

千鶴　すみません。

啓一郎　仕事中だということがわからないのか。用が済んだら、さっさと出ていけばいいんだ。

徳右衛門　そんなに怒ることはないだろう。千鶴も、悪気があったわけでは。

啓一郎　悪気がないからと言って、甘やかしていいとは思いません。（図面を持って）乾かしてきます。

啓一郎が去る。入れ替わりに、満寿江がやってくる。

満寿江　どうかしたんですか、啓一郎は。あんなに怖い顔をして。

千鶴　私が、大事な図面にお茶をこぼしてしまって。父上、申し訳ありません。

徳右衛門　気にするな。私は、おまえに感謝しているんだ。満寿江を見てみろ。一月前とは、別人ではないか。食事も残さず食べるし、買い物にも出かける。以前にも増して、元気になってくれた。

満寿江　（千鶴に）何もかも、千鶴のおかげですよ。あなたが来てから、家の中が明るくなったと、啓一郎も言ってました。

千鶴　嘘です。兄上が、そんなことを仰るはずがありません。

満寿江　なぜですか？

千鶴　兄上は、私を嫌っていらっしゃいます。ほとんど話をしたこともないですし、たまに話せば怒られてばかりですし。

満寿江　誤解ですよ。啓一郎は、人より少し、いえ、かなり口が重いだけなのです。

徳右衛門　子供の頃から、必要なことしか喋らない。生まれつき愛想がないんです。
満寿江　ずいぶんな言われ方だな。
徳右衛門　私は誉めてるんですよ。武士は、それぐらいでちょうどいいんです。
満寿江　満寿江、私はしゃべり過ぎか？
千鶴　わかりましたか、千鶴。嫌われているなどと考えるのはやめてください。
徳右衛門　でも。
千鶴　心配するな。そもそも、最初におまえを見つけてきたのは啓一郎だぞ。あいつが千鶴を引き取りたいと言ったんだ。嫌う理由などないではないか。
満寿江　本当ですか？　兄上が、私を見つけてくださったんですか？
徳右衛門　おまえ様、話してなかったんですか？
千鶴　すまん。話した気になっていた。
　そうだったんですか。兄上が。

　そこへ、りくがやってくる。

りく　千鶴様。夕餉の支度を手伝っていただけますか。
千鶴　承知いたしました。

　千鶴が去る。りくが湯呑みと盆を持って去る。徳右衛門と満寿江も去る。
　嘉永五年五月三十一日昼。忠兵衛がやってくる。

忠兵衛　千鶴様！　お稽古の時刻ですよ。千鶴様！

千鶴がやってくる。大刀を持っている。忠兵衛を見つけて、引き返そうとする。

忠兵衛　あ、千鶴様！　どこにいらしてたんですか。
千鶴　（大刀を後ろに隠して）ちょっと、庭を散歩してたんです。
忠兵衛　何を持っていらっしゃるんです？（と千鶴に歩み寄る）
千鶴　（更に隠して）別に何も。
忠兵衛　（後ろに回って）刀じゃないですか。そんな物をどうして。
千鶴　お願いします、見逃してください。
忠兵衛　まさか、りく殿を斬るつもりじゃないでしょうね？　いくら厳しくされてるからって、それだけは。
千鶴　違います。一人で素振りをしてただけです。もう一月も刀を振ってないから、どうしても我慢できなくて。
忠兵衛　真剣で素振りを？　信じられない。
千鶴　兄上には内緒にしてください。剣術はしないと約束したんです。
忠兵衛　そうなんですか？　だったら、我慢するしかないじゃありませんか。
千鶴　でも、これ以上我慢したら、私は忠兵衛殿を斬ってしまうかもしれません。
忠兵衛　そんな。
千鶴　どこか、心当たりはありませんか？　思い切り体を動かせる場所の。
忠兵衛　わかりました、考えましょう。とにかく、その大刀はしまってください。

千鶴と忠兵衛が去る。

嘉永五年六月一日朝。栗栖道場。静馬・鉄之助・勝太郎・春衣がやってくる。それぞれ稽古着を着て、竹刀を持っている。静馬と鉄之助は防具をつけている。静馬と鉄之助が向かい合って立つ。勝太郎は二人の間に立つ。春衣は少し離れた場所に座る。静馬と鉄之助が、互いに礼をする。

勝太郎　始め。

鉄之助が気合の声を出すが、なかなか打ち込めない。静馬が竹刀を下げる。鉄之助が静馬に打ちかかる。静馬が避ける。鉄之助は何度も静馬に打ちかかるが、そのたびにかわされる。鉄之助の息が上がってきたところへ、静馬が打ちかかる。鉄之助の面を打つ。

勝太郎　面あり、そこまで。

静馬と鉄之助が面を外す。春衣は立ち上がって、素振りを始める。

鉄之助　参った、参った。やっぱり強いな、静馬は。

勝太郎　稽古をさぼってばかりいるからですよ。

鉄之助　最近、勤めが忙しくてな。だから、朝稽古にしか顔を出せない。

勝太郎　夜はどうです。鉄之助さんさえよければ、いつでも稽古をつけますよ。
静馬　こいつは、ほとんど毎晩、啓一郎の家に行ってるんだ。徳右衛門殿に、洋式の砲術を教わってるんだと。
勝太郎　なるほどね。鉄之助さんも、剣より鉄砲が大事というわけですか。
鉄之助　待てよ。俺には、どっちも大切だ。だからここに来てるんじゃないか。
勝太郎　またまた。本当は、春衣さんに会うのが目的でしょう？
鉄之助　おかしなことを言うな。春衣さんに失礼だろう。すみません、春衣さん。
春衣　（素振りを止めて）いいえ。
静馬　鉄之助、一つだけ言っておく。俺より弱い男に、春衣をやる気はないからな。
勝太郎　どうしますか、鉄之助さん。潔く諦めますか？
春衣　若先生も、兄上も、ご冗談はやめてください。鉄之助様が困っていらっしゃるではないですか。

そこへ、千鶴と忠兵衛がやってくる。

忠兵衛　お稽古中、失礼いたします。栗栖先生、ご無沙汰しております。
勝太郎　どうも、お久しぶりです。ええと、どなたでしたっけ。
静馬　忘れたのか？　啓一郎の家に勤めている方で、名前は確か……。
忠兵衛　大橋忠兵衛です。印象に残らない顔で申し訳ありません。
春衣　（千鶴を示して、忠兵衛に）そちらの方は。
千鶴　お初にお目にかかります。青柳千鶴と申します。
鉄之助　何だ、やっぱり別人でしたか。一瞬、季江さんかと思いましたよ。
勝太郎　俺も驚きました。でも、よく見ると違いますよ。目元のあたりとか。

鉄之助　偉そうに言うな。季江さんと、ほとんど会ったことがないくせに。
勝太郎　鉄之助さんこそ、ろくに話をしたこともないでしょう。
鉄之助　馬鹿にするな。話ぐらいはしたさ。こんにちは、とか、こんばんは、とか。
静馬　それはただの挨拶だ。（千鶴に）騒がしくて申し訳ない。こいつら、啓一郎の姉上に、勝手に憧れてたんですよ。
春衣　兄上は違うんですか？　私も季江様は大好きでしたよ。
静馬　（忠兵衛に）名字が同じということは、啓一郎のご親戚ですか。
忠兵衛　いいえ、はい、そうなんです。千鶴様は遠いご親戚で、ずっと江戸にいらっしゃいまして。先日、縁あって、青柳家のご養女になられました。
鉄之助　本当ですか？　俺は一度も会ってませんけど。
忠兵衛　千鶴様は、大変、奥床しい方でして。外出されるのも今日が初めてなんです。
勝太郎　ひょっとして、その人と啓一郎さんは夫婦になるんですか？
千鶴　おかしなことを言わないでください。私は娘として、青柳家に入ったんです。
勝太郎　イヤだな、冗談ですよ。俺は栗栖勝太郎。この道場の師範です。
忠兵衛　（千鶴に）こちらは岩本鉄之助様。こちらが宇佐見静馬様。お二人とも、啓一郎様とは、藩校以来のお仲間です。
春衣　（千鶴に）静馬の妹の春衣です。よろしくお願いいたします。
鉄之助　（千鶴に）まさかとは思いますが、旅芸人の一座にいたことはないですよね？
忠兵衛　まさか。
鉄之助　一月ぐらい前、季江さんに似てる女子の芸人を見たんですよ。なあ、静馬。
静馬　そうだったか？
忠兵衛　世の中には、同じ顔をした人間が、三人はいるそうですし。千鶴様はご親戚ですから、季江様に似ていらっしゃるのは当たり前で。

鉄之助　それもそうですね。
忠兵衛　栗栖先生、今日はお願いがあって参りました。千鶴様を、こちらに入門させていただけないでしょうか。啓一郎様が通ってらしたとお話したら、是非、ご自分も教わりたいと仰いまして。
勝太郎　申し訳ない。女子の弟子は取らないと決めてるんですよ。
千鶴　（春衣を見て）でも、こちらの方は。
勝太郎　春衣さんは特別です。静馬さんと一緒に、子供の頃から鍛えてますからね。
千鶴　私も、初めて剣を持ったのは四つの時です。
勝太郎　それでも無理です。うちの稽古は厳しいんで。
千鶴　無理かどうかは、立ち合ってから決めてください。一本、お相手願えますか。
忠兵衛　おやめください、千鶴様。栗栖先生は、藩でも五本の指に入るお方ですよ。
千鶴　望むところです。
鉄之助　悔しいのはわかるが、春衣さんは本当に特別なんだ。そのへんの男より、よっぽど強いんだから。
千鶴　だったら、春衣さんと立ち合わせてください。負ければ、素直に諦めます。
静馬　春衣、相手をしてやれ。口で言っただけではわからないようだ。
春衣　承知いたしました。（千鶴に）では、着替えをしてきてください。
千鶴　着替えなど必要ありません。このままで結構です。
春衣　本当によろしいんですか？　手加減はいたしませんよ。
勝太郎　（千鶴に）春衣さんを怒らせたな。怒ると怖いんだ、この人は。
千鶴　竹刀を貸していただけますか。

勝太郎が千鶴に竹刀を渡す。千鶴と春衣が向かい合う。静馬が二人の間に立つ。

静馬　始め。

春衣が千鶴に打ちかかる。千鶴が避けて、春衣に打ちかかる。春衣がかわして、千鶴に打ちかかる。千鶴が春衣の竹刀を弾き飛ばす。春衣が床に膝をつく。

春衣　参りました。
鉄之助　（駆け寄って）大丈夫ですか、春衣さん。お怪我は。
千鶴　（勝太郎に）これでも特別だと仰るんですか？
勝太郎　威勢がいいだけのことはあるな。お望み通り、俺が立ち合おう。
静馬　勝さんが出るまでもない。（千鶴に）今度は俺が相手だ。

千鶴と静馬が向かい合う。千鶴がいきなり、静馬に打ちかかる。静馬は千鶴の竹刀を弾く。千鶴は体勢を崩すが、すぐに持ち直して、再び静馬に打ちかかる。静馬がかわして、千鶴の竹刀を叩き落とす。静馬が千鶴の目の前に、竹刀を突きつける。

千鶴　参りました。
鉄之助　（拍手して）大したもんだ。静馬を相手に、堂々と向かっていくとは。
千鶴　慰めは結構です。
勝太郎　いや、女子にしておくには惜しい度胸だ。気に入った。
忠兵衛　では、入門を認めていただけるんですね？
勝太郎　ええ。（千鶴に）悪かったな、無理だと決めつけて。
春衣　よかった。ずっと女子のお仲間が欲しかったんです。

千鶴　私のこと、怒ってないんですか？
鉄之助　春衣さんはそういう人なんだ。剣を持つと厳しいが、普段は誰よりも優しい。
勝太郎　鉄之助さん、誰よりも鼻の下が伸びてますよ。
千鶴　栗栖先生、みなさま、よろしくお願いいたします。
静馬　今度、啓一郎も連れてきてくれ。久しぶりにあいつと稽古がしたい。
勝太郎　誘っても無駄ですよ。啓一郎さんは、もう剣には興味がないんですから。
鉄之助　そんなことはないと思うぞ。
勝太郎　じゃ、どうして二年も顔を出さないんです。いくら台場作りが忙しくたって、音沙汰もないというのはおかしいですよ。
静馬　勝さん、よく考えろ。台場の建設は、殿のご命令だ。失敗は許されない。啓一郎は、藩を背負って働いてるんだ。気長に待ってやろう。
鉄之助　そこまでわかってるなら、一度ぐらい、台場を見に行けよ。おまえ、いつ誘っても、断ってばかりじゃないか。
静馬　啓一郎の仕事は立派だと思う。思うが、異国の技術には興味がないんだ。
鉄之助　静馬、俺と勝負してくれ。一本でも俺が取ったら、一緒に台場へ行こう。
勝太郎　本気ですか、鉄之助さん。静馬さんに勝てるわけないでしょう。
鉄之助　やってみなければわからない。受けてくれるか、静馬。
静馬　俺が台場を見たところで、どうなると言うんだ。
鉄之助　きっと啓一郎が喜ぶ。それだけだ。
勝太郎　それだけじゃ、おもしろくないですよ。九割九分、鉄之助さんの勝ち目はないんです。春衣さんを嫁にできるぐらいの褒美がないと。
鉄之助　いきなり何を言い出すんだ。
勝太郎　さっき、静馬さんも言ってたでしょう。静馬さんより弱い男に、春衣さんは

鉄之助　やれないって。俺だったら、あの場で勝負を申し込んでますよ。
勝太郎　そりゃ、勝さんは腕に自信があるから。
鉄之助　自信がないんですか？　だったら、静馬さんに謝って、取り消してください。
静馬　わかったよ。静馬。俺が勝ったら、春衣さんを嫁にくれるか。
勝太郎　いいだろう。
千鶴　よし、決まりだ。
春衣　春衣さん、いいんですか。どうして何も言わないんです。
千鶴　兄上がお決めになったことですから。
春衣　そんな。
勝太郎　兄上、鉄之助様。そろそろ勤めに出る時刻ではありませんか。
　では、朝の稽古はここまで。（千鶴に）昼から、他の弟子たちも来る。よければ、参加してくれ。

静馬・鉄之助・勝太郎・春衣が去る。

千鶴　（見送って）信じられない。夫婦になる相手を、勝負で決めるなんて。
忠兵衛　もしかすると、春衣様も望んでいらっしゃるのかもしれません。鉄之助様に嫁がれることを。
千鶴　そうだといいんですけど。

忠兵衛が去る。

嘉永五年六月二日朝。海岸。啓一郎がやってくる。水の入った竹筒を持っている。

啓一郎　ほら、水だ。歩き通しで疲れただろう。

千鶴　ありがとうございます。（と受け取って、飲む）

啓一郎　（正面を示して）これが中の台場だ。（遠くを指して）向こうが東の台場。（反対側を指して）そして、あれが西の台場だ。あと半年もすれば、すべて完成する。小田原の海を、異国の船から守れるんだ。

千鶴　全部、父上と兄上が作ってらっしゃるんですか。

啓一郎　俺は、ただの使い走りだ。工事を指図するには、まだまだ修行が足りない。

千鶴　兄上。お話とは何でしょうか。

啓一郎　話？

千鶴　家を出る時、私に話したいことがあると仰ったではないですか。それなのに、ここまでずっと、黙ったままでいらして。どうぞ、はっきり仰ってください。

啓一郎　千鶴は、誰から剣術を教わった。亡くなった父上か。

千鶴　そうです。

啓一郎　目隠しをして立ち合う技も、父上譲りか。

千鶴　私が暗闇でも剣が使えると聞いて、親方が思いついたんです。まだ父が生きていた頃、道場に通うお金はなかったので、河原や森で稽古をしていました。

父は昼間、人足の仕事をしてましたから、稽古は夕方から夜中にかけて。暗闇の中でも、集中すれば、相手の気配がわかる。それが父の口癖でした。

啓一郎　立派な方だったんだな、父上は。

千鶴　今でも、心から尊敬しています。一人になって、私を支えてくれたのは、父に習った剣でした。剣があったから、辛いことも耐えられたんです。

啓一郎　最初から、こうやって話を聞けばよかったな。そうすれば、おまえだって、一月も我慢せずに済んだんだ。

千鶴　え？

啓一郎　昨夜、鉄之助が家に来て、おまえと道場で会ったと話していった。

千鶴　すみませんでした、勝手な真似をして。忠兵衛殿のことは、怒らないでください。私が無理矢理、連れていけとお願いしたんです。

啓一郎　謝るのは俺の方だ。千鶴の気持ちも知らずに、剣術は忘れろなどと言って。

千鶴　兄上は間違っていません。忘れられない私が悪いんです。

啓一郎　ずっと禁止するつもりはなかったんだ。ただ、母上に心配をかけたくなかった。おまえが怪我でもすれば、ますます痩せてしまわれると思ったから。

千鶴　申し訳ありません。私は、自分のことしか考えていませんでした。もう、道場へは行きません。

啓一郎　そうじゃないんだ。どうも、俺は話が下手で困る。通っていいと言おうとしたんだ。怪我さえ、気をつければ。

千鶴　本当ですか？　許してくださるんですか？

啓一郎　青柳家に入ったからと言って、違う人間になる必要はない。おまえは、おまえのままでいればいいんだ。

千鶴　ありがとうございます。剣術も、行儀作法も、もっと頑張ります。

啓一郎　調子のいいことを言う。りくや忠兵衛がいないところで、ずいぶん行儀悪く振る舞っているそうじゃないか。襖を足で開けたり、庭の枇杷の木によじ登ったり。

千鶴　そんなはしたないこと、してません。

啓一郎　残念だったな。ちゃんと母上が見てたんだよ。

千鶴　そうなんですか？　どうしよう。

啓一郎　千鶴を見ていると飽きないと、楽しそうに笑っておられた。だから、道場に通うぐらいは、大目に見てくださるだろう。

千鶴　よかった。静馬様も勝太郎先生もお強いから、一緒に稽古できるのが楽しみだったんです。

啓一郎　鉄之助の名前は出てこないのか。

千鶴　そうだ。鉄之助様は、一座のことを仰ってませんでしたか。私、小屋で会ったのを、すっかり忘れていて。

啓一郎　大丈夫だ。千鶴が、あの美浪太夫だとは思っていなかった。

千鶴　もしかして、兄上も鉄之助様とご一緒にいらしたんですか。

啓一郎　覚えてないのか。俺は、何度か通ったんだが。

千鶴　すみません。でも、本当に感謝しています。私を見つけてくださって。おまえが来るまで、青柳家は誰もがみな、目隠しをしていたようなものだ。どんなに日が射しても、家の中は、いつも暗かった。千鶴が、その目隠しを外してくれたんだ。（空を見上げて）こうして、ゆっくり空を見るのも久しぶりだ。これほど明るいものだったんだな。

千鶴　（空を見上げて）私が今まで見た中で、一番、きれいな空だと思います。

啓一郎　同じ空の下に、オランダがあり、エゲレスがあり、メリケンがある。他にも

千鶴　たくさんの異国がある。言葉も違えば、考え方も違う。日本より技術の進んだ国が、いくらでもあるんだ。俺はいつか、この目ですべての国を見てみたい。それだけの旅ができる船が、日本でも作れる時代はきっと来る。

啓一郎　私も行ってみたいです。連れていっていただけますか。

千鶴　ああ。おまえ、人に話すんじゃないぞ。今は、異国へ渡る計画を立てただけで罪になるんだから。

啓一郎　兄上。私を引き取ってくださったのは、母上のためですよね？　それだけですよね？

千鶴　他に何かあると思うのか？

啓一郎　いいえ、別に。

千鶴　千鶴。道場で修行を積むのは構わない。だが、どんなことがあっても、刀だけは抜くな。おまえに何かあったら、母上が悲しむ。約束できるか。

啓一郎　わかりました。約束いたします。

千鶴　そろそろ帰ろう。腹が減ってきた。

啓一郎　はい。

千鶴と啓一郎が去る。

嘉永六年五月三日夕、菊池一座の掛け小屋の楽屋。すずめがやってくる。着物の繕いを始める。反対側から、鯉之丞がやってくる。酒瓶を持っている。

鯉之丞　すずめ、竜蔵はどこだ。
すずめ　さっき、表に出ていったけど。
鯉之丞　さては、また飲みに行きやがったな。舞台の片付けも手伝わねえで、とんでもねえ野郎だ。
すずめ　そう言う自分はどうなのよ。その手に持ってる物は何？
鯉之丞　俺はいいんだ。この年になったら、酒でも飲まなきゃ、やってられねえ。しかし、竜蔵は十九だぞ。まだまだ酒に溺れる年じゃねえ。
すずめ　淋しいんだよ、きっと。だって、今日も来なかったじゃない、千鶴ちゃん。
鯉之丞　来るわけねえだろう。ここは、武家の娘が来る所じゃねえ。来たら、この酒、全部おまえにやる。

そこへ、千鶴がやってくる。

千鶴　すずめ。親方。
すずめ　千鶴ちゃん！　来てくれたのね！

千鶴　表の看板、見たよ。あんた、居合抜きを始めたんだね。
すずめ　まだ下手クソだよ。親方にも怒られてばっかりだし。
千鶴　でも、一人前の芸人らしくなったよ。前より、貫禄が出てきた。
すずめ　千鶴ちゃんも変わったね。前より、綺麗になった。
鯉之丞　そうか？　俺には相変わらずのじゃじゃ馬に見えるがな。
すずめ　そんなことない。どこからどう見ても、武家のお嬢様じゃない。
鯉之丞　お嬢様がこんな所に来るもんか。（千鶴に）大方、黙って抜け出してきたんだろう。今頃、屋敷は大騒ぎだぞ。
千鶴　お生憎様。ちゃんとお許しをもらってきたよ。お供のお侍も連れてきた。
鯉之丞　生意気な口をききやがって。まさか、お屋敷でもその調子なんじゃねえだろうな？
千鶴　まさか。口答えなんかしたら、怖い女中さんに箒で叩かれちまうよ。
すずめ　千鶴ちゃん、その人に苛められてるの？
千鶴　そうじゃなくて、その女中さんは武家の作法に厳しいの。父上にも兄上にも、平気でお小言を言うんだから。
すずめ　へえ、千鶴ちゃんにはお兄さんがいるんだ。どんな人なの？
千鶴　啓一郎って名前なんだけどね、口が重くて、愛想もないけど、本当は優しい人。今日だって、みんなに会ってこいって言ってくださったし。
すずめ　お兄さんの方から？
千鶴　私は無理だと思ったの。武家の娘が掛け小屋に行くなんて、許されることじゃない。だから、諦めようって。でも、兄上はこう仰った。海音寺には青柳家の墓がある。墓参りに行くついでに寄るだけなら、別に構わないだろうって。

すずめ　千鶴ちゃん、その人が好きなの？

千鶴　何よ、いきなり。

すずめ　だって、目が潤んでるよ。こんな千鶴ちゃん、初めて見た。

鯉之丞　（千鶴に）つまらねえ夢は見ねえ方がいいぞ。芸人上がりがご家老の跡継ぎの嫁にはなれねえ。なれるわけがねえ。

千鶴　やめてよ、親方。そんな大それたこと、考えるわけないじゃない。

すずめ　でも、好きなんでしょう？

千鶴　好きって言うより、尊敬してるの。今だって、地震の後始末のために、寝る間も惜しんで働いてるし。あんなにまじめな人、見たことない。

鯉之丞　地震てのはいつの話だ。

千鶴　今年の二月。大きな山崩れがあって、家が千軒近くも潰れて。

鯉之丞　今年はやけに入りが少ないと思ったら、それが原因だったのか。

千鶴　小田原を一日でも早く元の姿に戻そうって、兄上も父上も必死で働いてる。

すずめ　でも、陰では随分、悪く言われてるみたい。

千鶴　どうして？

父上は台場作りの責任者だったの。去年の暮れに何とか完成したんだけど、目の玉が飛び出るようなお金がかかった。そこへ、あの地震でしょう？　台場さえ作らなければ、すぐに家が建てられたのにって。

鯉之丞　言いたいヤツには言わせておけばいいじゃねえか。

千鶴　口だけなら、いいけどさ。半月前に、勘定奉行の小助川って人が襲われて。

鯉之丞　殺されたのか？

千鶴　（頷いて）下手人はまだ捕まってない。小助川様は父上のお仲間で、台場作りを手伝ってたの。もしかすると、台場作りに反対してた人がやったのかも。

そこへ、忠兵衛がやってくる。

忠兵衛　千鶴様、そろそろお帰りにならないと、奥様がご心配なさいます。
千鶴　わかりました。（すずめに）ごめんね。もう行かなきゃ。
すずめ　でも、まだ竜ちゃんに会ってないじゃない。
鯉之丞　勝手に出ていった、あいつが悪いんだ。大橋様、そいつをとっとと連れて帰ってください。
千鶴　すずめ、竜蔵にまた来るって伝えて。
鯉之丞　馬鹿を言うな。おまえはうちの一座はもう何の関わりもねえ。ここには二度と顔を出すな。俺たちのことは忘れろ。

そこへ、竜蔵が飛び込んでくる。

竜蔵　親方、大変だ！
鯉之丞　おまえ、どこに行ってやがった。
竜蔵　そんなことはどうでもいいだろう。すぐそこで、侍同士の斬り合いがあったんだ。斬られた方は、かなり偉い人らしいぜ。
千鶴　名前は？　まさか、青柳じゃないよね？
竜蔵　千鶴、俺に会いに来てくれたのか？
千鶴　お願いだから、ちゃんと答えて。偉い人って、誰？　顔は見たの？
竜蔵　俺は見てねえ。死体には筵がかけられてたから。
忠兵衛　場所はどこだ。
竜蔵　この寺の裏だよ。人がいっぱい集まってるから、行けばわかる。

千鶴・忠兵衛が去る。竜蔵が後を追おうとする。

竜蔵　待てよ。何なら、俺が案内しようか？

鯉之丞　やめとけ、竜蔵。これ以上、千鶴に関わるんじゃねえ。

竜蔵　何でだよ。

鯉之丞　その方が千鶴のためだからだ。舞台の片付けが終わってねえ。二人とも手伝え。

すずめ　親方、そのお酒、私にくれるんだよね？

鯉之丞　誰がそんなことを言った。

すずめ　言ったよ。千鶴ちゃんが来たら、くれるって。（と鯉之丞に手から酒瓶を取って）竜ちゃん、片づけが終わったら、二人で飲もうね。

すずめ・竜蔵・鯉之丞が去る。

五月三日夜、青柳家。満寿江がやってくる。反対側から、りくがやってくる。

満寿江　りく、千鶴は帰ってきましたか？

りく　まだでございます。久しぶりに一座の者に会って、話の花でも咲かせているのでしょう。

満寿江　あなたの悪口で盛り上がっているのかもしれませんね。でも、若い娘の夜歩きは危険です。誰かを迎えにやりましょう。

りく　ご心配には及びませんよ。忠兵衛殿が一緒ですから。

満寿江　でも、千鶴にもしものことがあったら。

そこへ、千鶴・忠兵衛が走ってくる。

千鶴　母上！　父上は？

りく　千鶴様、何を取り乱しておいでです。武家の娘は、たとえ火事場から逃げる時でも、駆けてはなりません。

千鶴　こんな時に、作法なんか、気にしてられません。母上、父上はご無事なんですか？

満寿江　旦那様がどうしたと言うのです。

忠兵衛　半時ほど前、海音寺の裏で、斬り合いがありまして。殺されたのが身分の高い侍だと言うので、慌てて現場に駆けつけたのですが、遺体は既に運ばれた後。その場にいた町人に聞いても、斬られた侍の名前はわからず。

満寿江　それが旦那様だと？

千鶴　わかりません。わからないから、慌てて戻ったんです。

そこへ、徳右衛門がやってくる。

徳右衛門　千鶴、何を騒いでいる。

千鶴　父上！　ご無事だったんですか？

徳右衛門　ああ。今、風呂に入ってきた所だ。風呂場で命を落とす者は滅多にいない。

忠兵衛　奥様、なぜ最初に教えてくださらなかったのです。

満寿江　あなた方が早口で喚き立てるから、教える暇がなかったのです。

りく　千鶴様、海音寺の裏で襲われたのは、普請奉行の住田様です。

徳右衛門　（千鶴に）台場作りの時は、私の右腕となって、働いてくれた。何とか命を取り留めてほしいものだ。

千鶴　父上、これからお出かけになる時は、くれぐれもお気をつけください。

満寿江　（徳右衛門に）それは、私からもお願いします。何やら胸騒ぎがして、仕方ないのです。

徳右衛門　次に狙われるのは、私だと言うのか？

忠兵衛　恐れながら、私も奥様と同じ意見です。先日襲われた小助川様も、今日の住田様も、旦那様のお仲間ではありませんか。明日から供の数を増やすのが得策かと存じます。

徳右衛門　その必要はない。
千鶴　でも、父上に何かあったら。
徳右衛門　案ずるな、千鶴。私はこう見えても、若い頃、神道無念流で鳴らした男だ。刺客など、自分の手で追い払ってみせる。
満寿江　では、せめて、夜の外出はお控えくださいませ。
徳右衛門　わかった、わかった。これからは日が暮れる前に帰ると約束しよう。
忠兵衛　下手人はやはり保守派のどなたかでしょうか。
徳右衛門　忠兵衛、その、保守派という呼び方はよせ。小田原藩は一つだ。保守派も改革派もない。
忠兵衛　しかし、筆頭家老の佐野様を始め、台場作りに反対した方々は皆、旦那様のご批判をなさっています。そうだろう、りく。
りく　ええ。中には、こんなことを言う人もいます。台場を作って得をしたのは、賄賂をたっぷり手に入れた青柳だけだと。
千鶴　許せない。父上は寝る間も惜しんで働いたのに。
徳右衛門　そんなことを言っているのは、一部の愚かな人間だけだ。
忠兵衛　しかし、そのうちの誰かが住田様を襲ったのではありませんか？
徳右衛門　確かに、このままでは本当に藩が割れるだろうな。しかし、安心しろ。昼間、佐野様から、ありがたい話をいただいた。
忠兵衛　今までいろいろ邪魔してきたことを、詫びてきたのですか？
徳右衛門　そうではない。縁談だ。啓一郎に娘をもらってほしいと言われた。佐野家と青柳家とが手を携え、藩のために尽くしていこうと。
満寿江　今、何と仰いました？　啓一郎に縁談？
徳右衛門　佐野様には、ご息女が三人いらっしゃってな。我が家にお迎えするのは、二

満寿江　番目の、今年十六になられるお方だ。
徳右衛門　まさか、お受けになったのですか？
満寿江　まさかとは何だ。これ以上は望めぬ良縁ではないか。
りく　私は、啓一郎と千鶴を夫婦にさせようと思っておりました。
徳右衛門　奥様！
満寿江　本気か、満寿江。私は、そんなつもりで千鶴を養女にしたわけではないぞ。最初は私もそうでした。でも、この一年で考えが変わりました。千鶴なら、啓一郎の妻として立派にやっていけると。
徳右衛門　待て、待て。千鶴は啓一郎の妹だぞ。
満寿江　寝ぼけたことを仰らないでください。血は繋がっておりません。
徳右衛門　寝ぼけているのは、おまえの方だ。佐野様から直々に手を結ぼうと言われたんだぞ。藩を一つにする、またとない機会ではないか。
満寿江　啓一郎は、おまえ様の道具ではありません。
徳右衛門　何だと？

そこへ、啓一郎がやってくる。

啓一郎　父上、遅くなって、申し訳ありません。
りく　お帰りなさいませ。
徳右衛門　（満寿江に）今の話は後回しだ。啓一郎、住田殿はどうだった。
啓一郎　幸い一命は取り留めましたが、まだ油断できない状態です。襲ってきたのは一人。相当の使い手と思われます。住田様には、護衛が一人ついていたのですが、その場で斬殺されました。ただし、敵にもかなりの傷を負わせたよう

です。右の肩あたりに。

徳右衛門　住田殿は相手の顔を見てないのか。

啓一郎　頭巾を被っていたそうです。しかし、住田様は敵の太刀筋を覚えていらっしゃいました。無外流の型に似ていたようだと。

徳右衛門　無外流だと？　おまえが通っていた栗栖道場は確か。

啓一郎　無外流です。我が藩には、無外流の道場はあそこしかありません。先程、目付の役人が調べに向かいました。

徳右衛門　すぐに捕まってくれるといいが。住田殿の所には、明日、見舞いに行こう。

啓一郎　土屋様から、鉄砲の図面をお預かりしています。

徳右衛門　私の部屋で見よう。りく、茶を二つ頼む。

りく　かしこまりました。

徳右衛門と啓一郎が去る。反対側へ、りくが去る。

満寿江　千鶴、あなたも気をつけるのですよ。今日のように、夜出歩くのは、もうやめてください。

千鶴　わかりました。

満寿江　さっきは驚いたでしょう？　いきなり、啓一郎と夫婦にさせたいなんて言われて。でも、私は前々からそう思っていたのですよ。佐野様のご息女の話は、旦那様に断っていただきます。

千鶴　でも、藩を一つにするためには、お受けした方が。

満寿江　藩も大事ですが、啓一郎も大事です。あなたが来てから、啓一郎は変わった。前より口数が増えて、よく笑うようになった。あなたにはこれからもずっと

啓一郎のそばにいてやってほしいのです。

千鶴　でも、私は芸人上がりです。

満寿江　あなたには、相手の心を明るくする力がある。一座で過ごした十年は、無駄ではなかったのです。

千鶴　母上。

満寿江　明日も朝稽古が行くのでしょう？　私たちは先に休ませてもらいましょう。

千鶴・満寿江が去る。反対側から、りくがやってくる。茶碗を二つ載せた盆を持っている。

忠兵衛　しかし、奥様も強引なお方だ。千鶴様のお気持ちは少しも聞こうとしない。

りく　庭に、枇杷の木がございますよね？　雨が降ると、幹の部分に文字が浮かび上がるんです。「千鶴は啓一郎にべた惚れ」と。

忠兵衛　なるほど、奥様はそれを見たわけか。自然の力って、やっぱりすばらしいな。

りく　まさか、本気にされるとは。

りくが去る。後を追って、忠兵衛も去る。

五月四日朝、栗栖道場。静馬・勝太郎・春衣がやってくる。

春衣　若先生、今日はあまり話をなさいませんね。お体の具合でも悪いんですか？

勝太郎　ただの寝不足だ。昨夜、布団に入ったところへ、目付の役人が来やがって。

静馬　目付が何のために。

勝太郎　昨夜、普請奉行の住田が襲われたんだ。下手人は頭巾を被っていて、無外流の型を使ったらしい。

春衣　本当ですか？　まさか、若先生が疑われているんですか？

勝太郎　俺だけじゃない。この十年の間に、うちに通った人間。それをすべて教えろと言われた。

春衣　それじゃ、私も兄上も？

静馬　馬鹿馬鹿しい。うちの道場の門人が、人を殺めたりするものか。

勝太郎　（春衣に）俺もあんまり頭に来たから、役人に言ってやった。住田を殺したいと思ってたヤツは、他にもたくさんいるんじゃないかって。

春衣　保守派の方々ですか？

勝太郎　それだけじゃない。住田は普請奉行だ。台場を作った張本人と言ってもいい。小田原中の人間から恨まれて、当然なんだ。

静馬　そこまでだ、勝さん。疑われて、腹が立つのはわかるが、住田様に罪はない。

勝太郎　悔しいんですよ、俺は。台場作りが始まって以来、弟子は減る一方です。その上、人殺しの疑いまでかけられたら、うちの道場はおしまいだ。

そこへ、千鶴がやってくる。

春衣　千鶴さん、もうお帰りですか？

千鶴　ええ。母上から、稽古が終わったら、すぐに帰るように言われていますので。

反対側から、鉄之助が走ってくる。

鉄之助　勝さん、遅くなって、済まない。

勝太郎　稽古はとっくの昔に終わりましたよ。

鉄之助　わかってる。一言詫びてから、城に行こうと思って。

勝太郎　違うでしょう？　あなたは春衣さんの顔を見に来たんでしょう？

鉄之助　違う。

勝太郎　あなたって人は、寝ても覚めても、春衣さんだ。そんな浮ついた調子だから、静馬さんに勝てないんですよ。あれから、何度勝負しました？　三度やって、三度とも駄目。一体、いつまで春衣さんを待たせるつもりです。

鉄之助　今度は必ず勝つ。今度こそ。

勝太郎　言い切りましたね？　じゃ、今、やってもらおうじゃないですか。

静馬　勝さん、俺はそろそろ城に行く時間だ。

鉄之助　静馬、相手をしてくれ。（と勝太郎の手から木刀を取る）

静馬　明日にしよう。道場で、防具をつけて。

鉄之助　いや、今だ。今、勝負してくれ。頼む。

静馬と鉄之助が向かい合って立つ。勝太郎が二人の間に立つ。

勝太郎　始め。

鉄之助が静馬に打ちかかる。静馬がかわして、鉄之助に打ちかかる。鉄之助がかわして、静馬に打ちかかる。静馬が受ける。鉄之助が静馬を押す。静馬が払って、鉄之助に打ちかかる。鉄之助が静馬の木刀を打つ。静馬が膝をつく。鉄之助が静馬に打ちかかる。

勝太郎　そこまで！

鉄之助　勝さん、なぜ止める。

静馬　わからないのか？　おまえの勝ちだ。

勝太郎　驚いたな。本当に勝つとは思いませんでしたよ。

鉄之助　勝さん、俺を殴ってくれ。いや、自分でやるからいい。（自分で頬を叩いて）痛くない。いや、やっぱり痛い。どっちなんだ。

勝太郎　落ち着いてください。春衣さんに何か言うことがあるんじゃないですか。

鉄之助　いいのか、静馬？

静馬　好きにしろ。

鉄之助　（春衣に歩み寄り）春衣さん、一生、ついていっていいですか。

勝太郎　逆じゃないですか？

鉄之助　わかってるよ。俺は、一生、ついてきてくれますかって、言おうとしたんだ。

春衣　ついていきます。ふつつか者ですが、よろしくお願いします。

鉄之助　ありがとうございます、春衣さん！　ありがとう、静馬！
勝太郎　じゃ、前祝いと行きますか。親父の、とっておきの酒を出しますよ。
鉄之助　酒はまずい。これから勤めなんだし。
勝太郎　鉄之助さんは弱いからな。酒も、静馬さんに負けないぐらい鍛えないと。
鉄之助　それは無理だ。静馬は底無しじゃないか。
勝太郎　じゃ、お茶で乾杯しましょう。ほらほら、春衣さんも。

鉄之助・勝太郎・春衣が去る。静馬も歩き出す。

千鶴　静馬様、間違っていたら、すみません。どこかにお怪我をなさっているのではありませんか？
静馬　なぜそんなことを聞く。
千鶴　先程の立ち合いを見ていて、そう思ったものですから。
静馬　いつもと違ったと言うのか？
千鶴　ええ。鉄之助様の上段を受けられた時、おかしな気配を感じました。右の肩を庇うような。
静馬　それで、どうする気だ。鉄之助に、今の勝負はなしだと言うのか。
千鶴　私は何も言いません。静馬様が黙っていらっしゃったんですから。
静馬　昨夜、酔っ払って、柱に肩をぶつけたんだ。そんなみっともないことが言えるわけないだろう。
千鶴　そうなんですか？　でも、静馬様は、お酒にお強いのでは。

静馬が千鶴に打ちかかる。千鶴は間一髪でかわす。

千鶴　何をなさるんです。
静馬　気配が違うだと？　言ってくれるじゃないか。目隠しで鍛えた勘は、衰えてないというわけか。
千鶴　何のことですか？
静馬　おまえは一年前まで、菊池一座にいた。舞台では、美浪太夫と名乗っていた。
千鶴　違います。私は｜｜｜
静馬　啓一郎の親戚か？　それなら、父の名は何と言う。母の名は。江戸のどこに住んでいた。
千鶴　両国の回向院の近くです。父の名は｜｜｜
静馬　無駄な足掻きはやめろ。俺は、おまえが昨夜、掛け小屋に入っていくのを見たんだ。大方、昔の仲間に会いに行ったんだろうが、少々軽はずみだったな。
千鶴　住田様を斬ったのは、あなただったんですか？
静馬　おかしなことを言う。おまえを見かけただけで、下手人扱いか。
千鶴　とぼけないでください。住田様は、小屋の近くで襲われたじゃないですか。
静馬　余計な知恵を回してる暇があったら、自分の心配をしろ。芸人上がりを養女にしたとわかれば、徳右衛門殿の立場はどうなるか。
千鶴　誰かに話すおつもりですか？
静馬　俺の頼みを聞いてくれるなら、他言はしない。
千鶴　頼みとは？
静馬　徳右衛門殿の予定が知りたい。次に出かけるのはいつだ。日にちと時刻と行き先。それを聞き出してこい。
千鶴　今度は父上を斬るおつもりですか？

静馬　誰がそんなことを言った。俺は徳右衛門殿の護衛がしたいだけだ。
千鶴　嘘です。護衛がしたいなら、父上に直に聞くはずです。
静馬　俺は無外流の使い手だ。下手人かもしれない男に、護衛などさせるものか。しかし、俺は本物の下手人が許せない。無外流を悪用したヤツを、この手で捕らえたいのだ。
千鶴　信じられません。とにかく、お断りします。
静馬　啓一郎のそばにいたくないのか。
千鶴　え？
静馬　一座にいたことが広まれば、青柳家にはいられなくなる。啓一郎とも、二度と会えなくなる。それでも構わないのか。
千鶴　構いません。
静馬　一日だけ待ってやる。ゆっくり考えろ。

静馬が去る。反対側へ、千鶴が去る。

五月四日夜、青柳家。徳右衛門と鉄之助がやってくる。

徳右衛門　そうか。お主もやっと身を固める気になったか。
鉄之助　本当はもっと早く固めてしまいたかったのですが。
徳右衛門　最初が肝心だぞ。春衣殿の尻に敷かれたくなかったら、甘い顔は見せるな。
鉄之助　そういうものでしょうか。
徳右衛門　春衣殿も、今はおまえに逆らわないだろう。だがな、妻になった途端に、女は変わる。子猫が虎になり、金魚が鮫になるのだ。
鉄之助　では、奥様も虎に？
徳右衛門　馬鹿を申すな。私がしっかり手なずけたから、今でも子猫のままだ。

そこへ、千鶴・満寿江・りくがやってくる。それぞれ、湯呑みを載せた盆や、菓子を載せた台などを持っている。

りく　旦那様、お茶をお持ち致しました。
満寿江　鉄之助殿、この度は誠におめでとうございます。
徳右衛門　（菓子を見て）これは、私がわざわざ都から取り寄せた、錦煎餅ではないか。
満寿江　ですから、大切なお客様にお出しするのです。いけませんでしたか。

徳右衛門　さすがは満寿江、よく気がついてくれた。（鉄之助に）遠慮せずに食え。
鉄之助　その前に一つ、お願いしたいことがあります。（と手紙を差し出して）これ
れは父からの書状です。本来ならば、こちらにお伺いすべきところですが、
今朝、腰を痛めまして。
徳右衛門　拝見しよう。（受け取って、読む）
千鶴　（鉄之助に）大丈夫なのですか、父上のお腰は。
鉄之助　大したことはないんだ。医者も、二、三日も休めば治ると。
徳右衛門　父上に伝えてくれ。謹んでお受けすると。
千鶴　お受けするって、何を？
徳右衛門　鉄之助と春衣殿の仲人だ。（満寿江に）構わないだろう。
満寿江　お仲人は、上役にお願いするのが筋では？
徳右衛門　忘れたのか。鉄之助は勘定組だ。奉行の小助川殿が亡くなって、後任はまだ
決まっておらん。
満寿江　そうでしたね。（鉄之助に）ならば、喜んでお受け致しましょう。
鉄之助　ありがとうございます。これでやっと父に認めてもらえます。
千鶴　どういうことですか？　父上は反対なさってたんですか？
鉄之助　ああ。家柄が違いすぎると言って。
りく　（千鶴に）鉄之助様の家は五百石。このまま順調に出世すれば、奉行になる
のは間違いございません。一方、春衣様の家は六十石。平侍の娘は、平侍の
家に嫁ぐのが常識でございます。
鉄之助　（千鶴に）父もそう言って、さんざん怒鳴りまくって。で、腰を痛めた次第
です。
徳右衛門　家老の私が仲人になれば、父上も納得するというわけか。そういうことなら、

精一杯、務めさせてもらおう。

そこへ、忠兵衛と啓一郎がやってくる。

忠兵衛　旦那様、啓一郎様がお戻りになられました。
啓一郎　父上、住田様がつい先程、息を引き取られました。
鉄之助　何だと？　何とか一命を取り留めたのではなかったのか？
啓一郎　夕方、容態が急変したんだ。（徳右衛門に）私が駆けつけた時には、もうお目通りがかなわず、最期はご家族の見守る中で。
徳右衛門　惜しいことを。何者の仕業か知らんが、愚の骨頂だ。同じ藩の中で命を奪い合うなど、不毛なだけではないか。
りく　（啓一郎に）それで、ご葬儀の日時は？
啓一郎　明日の暮六つだそうだ。
徳右衛門　忠兵衛、今すぐ、武具奉行の竹内殿の役宅へ行ってきてくれ。明日の会合は延期すると伝えるのだ。明後日の申の刻に。
忠兵衛　承知致しました。りく、提灯を頼む。
りく　はい、ただいま。

忠兵衛・りくが去る。

千鶴　父上、会合というのは？
徳右衛門　我が藩はこの度、新式の鉄砲を買い入れることになった。その打ち合わせだ。
満寿江　夜の外出は危のうございます。葬儀はともかく、会合とやらはなるべく早く

切り上げて、お帰りください。

徳右衛門　わかっている。必ず暗くなる前に戻る。

鉄之助　徳右衛門殿、私でよければ、護衛にお加えください。

徳右衛門　それは遠慮しておこう。お主にはお主の役目がある。

鉄之助　しかし、徳右衛門殿にもしものことがあったら、小田原藩はおしまいです。

徳右衛門　わからんヤツだな。お主は祝言を控えた身ではないか。今のお主の役目は、春衣殿を幸せにすること。藩のことより、自分のことを考えろ。

満寿江　おまえ様、今の言葉は誠でございますか？

徳右衛門　今の言葉とは？

満寿江　藩のことより、自分のことを考えろと。本当にそうお思いでしたら、啓一郎と千鶴を一緒にさせてくださいませ。

徳右衛門　またその話か。何も、今、持ち出すことはないだろう。

満寿江　またお逃げになるおつもりですか？

徳右衛門　啓一郎、おまえはどう思う。

啓一郎　お待ちください。私には、何の話か、さっぱり。

徳右衛門　（徳右衛門に）右に同じです。

満寿江　啓一郎に、佐野様のご息女との縁談が持ち上がっているのだ。それなのに、満寿江は千鶴と一緒にしたいと言う。青柳家の、いや、小田原藩のためにはどちらを選ぶべきか。（啓一郎に）おまえならわかるな？

満寿江　何が小田原藩のためですか。藩を改革する前に、その古臭い頭を改革なさいませ。

鉄之助　（啓一郎に）虎だ。おまえの母上は、虎の目をしている。

啓一郎　何を言ってるんだ？

徳右衛門　聞いてるのか、啓一郎。佐野様と縁を結べば、不毛な争いも終わるんだぞ。
満寿江　季江のことをお忘れになったのですか。あの子は本当は嫁に行きたくなどなかったのです。私たちが強く勧めたから、仕方なく行った。あの子が亡くなったのは、私たちのせいです。
徳右衛門　満寿江、その話は二度するなと言ったはずだぞ。
満寿江　申し訳ありません。つい。
徳右衛門　啓一郎、答えろ。佐野様の縁談、お受けしてよいな？
啓一郎　あまりに急なお話で、すぐには答えられません。
徳右衛門　ならば、じっくり考えるがよい。と言っても、あまり長くは待てんぞ。
啓一郎　心得ました。
徳右衛門　大声を出したら、腰が痛くなってきた。失礼して、休ませてもらうぞ。
千鶴　父上、明後日の会合はどちらで？
徳右衛門　竹内殿の役宅だ。それがどうかしたか。
千鶴　いいえ。ちょっと気になったものですから。
徳右衛門　満寿江、着替えを手伝ってくれ。
満寿江　かしこまりました。

徳右衛門と満寿江が去る。

鉄之助　啓一郎、俺もそろそろお暇する。家に帰って、仕事をしないと。
啓一郎　婚礼の準備か？
鉄之助　いや、勘定組のお役目だ。と言っても、これは俺が勝手にすることなんだがな。小助川様が亡くなる直前に、普請組の帳簿を調べておられて。それがど

うにも気になるんだ。
啓一郎　どうして。
鉄之助　所々に、おかしな数字があって。まあ、結論は終わってからだ。
啓一郎と鉄之助が去る。そこへ、りくがやってくる。
りく　千鶴様、望みを捨ててはいけませんよ。
千鶴　望み？
りく　啓一郎様は佐野様の縁談をお受けになりませんでした。それは、千鶴様のことがお好きだからです。
千鶴　そんなの、信じられません。
りく　庭に、枇杷の木がございますよね？　雨が振ると、（千鶴が歩き出したのを見て）千鶴様！
千鶴・りくが去る。

五月五日朝、栗栖道場。春衣がやってくる。木刀で素振りをする。そこへ、千鶴がやってくる。

千鶴　おはようございます、春衣さん。なぜここで素振りを？

春衣　中ではできないんです。話し合いをしているので。

千鶴　何かあったんですか？

春衣　道場の門人が、昨日、五人も辞めたんです。五人とも、住田様を襲った疑いをかけられたそうで、身の証を立てるために、道場とは縁を切ると。

千鶴　でも、五人も辞めたら、道場はどうなるんです。

春衣　兄上は、しばらく閉めた方がいいと仰っています。でも、若先生は絶対に続けるって。

千鶴　鉄之助様は？

春衣　まだいらっしゃってません。きっと、また寝坊です。

千鶴　そうだ。昨夜の話はお聞きになりましたか？

春衣　仲人の話ですね？　青柳様は引き受けてくださったんでしょうか？

千鶴　ええ。精一杯、務めさせてもらうと仰ってましたよ。

春衣　良かった。これで、鉄之助様の父上も許してくださると思います。

千鶴　私、ちゃんとお祝いを言ってませんでしたね。おめでとうございます。

春衣　ありがとうございます。でも、まだ信じられないんです。本当に一緒になれるとは思ってなかったので。

千鶴　どうしてですか？

春衣　家柄が違いますから。無理だ、諦めろと自分に言い聞かせていたんです。

千鶴　春衣さんは、いつから鉄之助様のことを？

春衣　笑わないでくださいね。道場に通い始めた頃からです。

千鶴　春衣さんが通い始めたのは、四つの時ですよね？　そんなに小さい頃から？

春衣　その頃の私は、剣に興味などなかったのです。兄の命令で、仕方なく通っていただけで。だから、稽古が辛くて、いつも辞めたいと思っていました。そんな私を励ましてくださったのが、鉄之助様だったんです。辛いのは俺も同じだ、一緒に頑張ろうって。

千鶴　静馬様は何も仰らなかったんですか？

春衣　兄は厳しい人ですから。でも、仕方ないんです。私たちの父は、私が生まれてすぐに亡くなって。だから、宇佐見家は兄が支えてきたんです。私にとっては、兄であると同時に父でもあるんです。

千鶴　それで、静馬様の仰ることには、口答えなさらないんですね？

春衣　兄は、間違ったことは絶対に言いません。それが時々、息苦しくもあって。でも、ここに来れば、鉄之助様に会えた。今日まで通い続けることができたのは、鉄之助様のおかげなんです。

千鶴　羨ましいです。子供の頃から好きだった人と夫婦になれるなんて。

春衣　千鶴さんはどうなんですか？　お好きな方はいらっしゃらないんですか？

千鶴　そういう人は別に。

春衣　そうですか。私は、啓一郎様がお好きなのかと思っていました。だって、い

つも啓一郎様のお話をなさるから。兄妹と言っても、血は繋がってませんよね？　だから、いつかは夫婦になられるんだろうと。

千鶴　兄上は佐野様のご息女と一緒になります。

春衣　そうなんですか？　ごめんなさい。私ったら、勝手なことばかり言って。

そこへ、静馬と勝太郎がやってくる。

勝太郎　千鶴さん、来てたのか。悪いが、今日の稽古は休みだ。

千鶴　閉めるんですか、道場を。

勝太郎　とりあえず、一月休む。しかし、一月経ったら、必ず再開する。こんなことで、道場を潰してたまるか。

静馬　春衣、大先生に挨拶してこい。

勝太郎　挨拶って？

静馬　春衣はもうすぐ道場を辞めるんだ。代わりに、花嫁修行をするんだそうだ。

春衣　（勝太郎に）急な話で、申し訳ありません。結納が終わるまでは、お世話になりますので。

勝太郎　惜しいな。昨日辞めたヤツらより、春衣さんの方がよっぽど強いのに。本気を出したら、鉄之助さんだって危ない。

静馬　聞き捨てならんな。俺は鉄之助に一本取られたんだぞ。俺より春衣の方が強いと言うのか？

勝太郎　静馬さん、正直に言ってください。昨日は手を抜いたでしょう？

静馬　馬鹿を言うな。

勝太郎　俺の目はごまかせませんよ。本気でやったら、あなたが負けるわけでない。

よほど具合が悪いか、怪我でもしてない限り。

春衣　兄上、若先生が仰ったことは本当ですか？

勝太郎　（静馬に）なんだかんだ言ったって、鉄之助さんはあなたの親友だ。いつかは負けてやろうと思ってたんでしょう？

静馬　春衣、鉄之助には決して言うなよ。

春衣　もちろんです。兄上、ありがとうございました。（と歩き出す）

勝太郎　待て、俺も行く。親父のやつ、きっと泣くぞ。春衣さんがお気に入りだったからな。

勝太郎と春衣が去る。

静馬　返事を聞かせてもらおう。

千鶴　（土下座して）お願いします。父上には手を出さないでください。

静馬　俺の頼みは断ると言うのか。

千鶴　これ以上、人を殺めるのはやめてください。春衣さんが知ったら、きっと悲しみます。あの人はあなたを信じているんです。

静馬　啓一郎と会えなくなってもいいのか。

千鶴　構いません。私は青柳家から出ていきます。

静馬　そうか。おまえは啓一郎より、徳右衛門殿を選ぶのか。徳右衛門殿さえ助けられれば、啓一郎はどうなってもいいと言うんだな？

千鶴　どういう意味ですか。

静馬　啓一郎なら、行き先を調べる必要はない。俺が呼び出せば、どこにでもやってくる。海岸だろうと、墓場だろうと。

千鶴　まさか、兄上を？

静馬　久しぶりに、二人で酒でも飲むか。知ってたか？　あいつも結構、強いんだ。刀が振れなくなるほど酔わせるには、朝までかかるかもしれん。

千鶴　やめてください！

静馬　おまえが選んだんだ。文句を言うな。

千鶴　……父上は明日、お出かけになります。

静馬　もう気が変わったのか。よほど、啓一郎に惚れているらしいな。それで、時刻と行き先は。

千鶴　申の刻、武具奉行の竹内様の役宅です。

静馬　帰りは暮六つあたりか。刺客にとっては、絶好の機会だ。精々、しっかりと護衛することにしよう。

静馬が去る。反対側へ、千鶴が去る。

五月六日夕、青柳家。満寿江がやってくる。

満寿江　りく！　りく！

反対側から、りくがやってくる。

りく　何でしょう、奥様。

満寿江　旦那様はまだですか？　もう日が暮れるというに。

りく　私が表を見て参りましょうか。

満寿江　いいえ、忠兵衛を呼んでください。今すぐ、旦那様を迎えに行かせましょう。

りく　それは無理でございます。今日のお供は忠兵衛殿ですから。

そこへ、啓一郎がやってくる。

啓一郎　母上、何かあったんですか？

満寿江　父上がまだ戻らないんです。その上、今日のお供は忠兵衛なのです。

啓一郎　忠兵衛を馬鹿にしてはいけませんよ。いざとなったら、自分の命を捨ててでも、父上を守る男です。

満寿江　私は忠兵衛にも死んでほしくありません。今すぐ、迎えに行ってください。
啓一郎　承知しました。

啓一郎が去る。

りく　奥様、ご心配には及びませんよ。旦那様が竹内様の役宅へいらっしゃったことは、この家の者以外、知らないのですから。
満寿江　なぜそう言い切れるんです。誰かが漏らすことも考えられるでしょう。
りく　そんな卑劣なことをする者は、この家におりません。一人も。

満寿江・りくが去る。
同じ日の夜、路上。啓一郎がやってくる。立ち止まって、振り返る。が、再び歩き出し、去る。後から、千鶴が走ってくる。大刀を持っている。周囲を見回す。千鶴の背後から、静馬がやってくる。

静馬　どうした。刀など持ち出して。
千鶴　静馬様、私と立ち合ってください。
静馬　何だと？
千鶴　私は間違っていました。父上と兄上、どちらかを選ぼうとするなんて。その前に、私がいなくなればよかった。青柳家を出てしまえばよかったんです。
静馬　だったら、なぜこんな所をうろついてる。さっさと消えればいいだろう。
千鶴　それは、あなたを止めてからです。（と刀を抜く）
静馬　おまえ、命が惜しくはないのか。

千鶴　父上をお守りするためなら、死んでも構いません。
静馬　徳右衛門殿さえいなくなれば、啓一郎と一緒になれるんだぞ。それがおまえの望みではないのか？
千鶴　違います。

静馬が刀を抜いて、千鶴に斬りかかる。千鶴がかわして、静馬に斬りかかる。静馬が千鶴の剣を受けて、よろめく。千鶴が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、千鶴に斬りかかる。千鶴が静馬の剣を受けて、よろめく。が、すぐに斬り返そうとする。そこへ、啓一郎・徳右衛門・忠兵衛がやってくる。

啓一郎　千鶴、何をしている！

静馬が千鶴に斬りかかる。千鶴がかわして、静馬の肩を斬る。静馬が肩を押さえて、跪く。啓一郎と忠兵衛が静馬に駆け寄る。

啓一郎　大丈夫か、静馬。
忠兵衛　（静馬に）血が出ています。急いで、手当てをしないと。
静馬　いや、それほど深い傷ではない。血だけ止めれば、それで済む。
徳右衛門　千鶴、これはどういうことだ。なぜ静馬を斬った。
千鶴　違うんです、父上。静馬様は父上を――
静馬　青柳様、千鶴さんは誤解しているんです。私がここに来たのは、青柳様の護衛をするため。それなのに、千鶴さんは、私が青柳様を狙っていると思い込んで。

千鶴　（徳右衛門に）誤解じゃありません。静馬様は本当に父上を斬るつもりだったんです。

静馬　俺が、そんなことを一度でも口にしたか。護衛がしたいだけだと言ったはずだ。

啓一郎　（千鶴に）なぜ静馬を疑った。

静馬　俺が無外流の使い手だからだろう。それで、住田様を襲ったのは、俺だと思った。その俺が、青柳様の護衛をしたいと言ったから。

啓一郎　（千鶴に）無外流の使い手など、藩に百人以上はいる。この俺だってそうだ。俺でなく、静馬を疑ったのはなぜだ。答えろ。

千鶴　一昨日、静馬様が怪我をなさっていることを知ったんです。住田様を襲った人は、護衛に右肩を斬られたんですよね？　静馬様も右肩に怪我を。

静馬　これは今、あなたに斬られた傷だ。

千鶴　わざと斬らせたんですか？　わざと同じ場所を。

啓一郎　いい加減にしろ。おまえは、自分が何を言っているのか、わかっているのか？

千鶴　静馬に傷を負わせた上に、謂れのない罪まで被せようとしているんだぞ。

啓一郎　私はただ、父上をお守りしたくて。

千鶴　勝手なことをする前に、なぜ俺に言わなかった。静馬に疑いを持った時、真っ先に。一年前の約束を忘れたのか。何があっても、刀は抜かないという約束を。

徳右衛門　兄上……。

静馬　啓一郎、もういいではないか。後は、家に戻ってから話そう。

徳右衛門　青柳様、啓一郎に縁談があるというのは本当ですか。誰から聞いた。

静馬　鉄之助です。満寿江殿が、啓一郎と千鶴さんを夫婦にしたいと考えていらっしゃることも聞きました。しかし、青柳様は強く反対されたとか。

徳右衛門　それがどうかしたのか。

静馬　まさかとは思うのですが、千鶴さんは青柳様を斬ろうとしたのかもしれません。

忠兵衛　千鶴様が旦那様を？

静馬　千鶴さんは、どうしても啓一郎と一緒になりたかった。だから、青柳様が邪魔だったんだ。違いますか、千鶴さん。

千鶴　……。

徳右衛門　どうした。なぜ黙っている。

啓一郎　千鶴！

千鶴が走り去る。

忠兵衛　信じられません。千鶴様は本当に旦那様を斬るおつもりだったのでしょうか。

静馬　わからない。俺はもしかしたらと思っただけで。

徳右衛門　しかし、千鶴は否定しなかったではないか。

啓一郎　（静馬に）千鶴に代わって謝る。この通りだ。（と頭を下げる）

静馬　いや、俺も悪かったんだ。護衛がしたければ、最初から青柳様にお願いするべきだった。

啓一郎　父上、静馬をお願いします。

啓一郎が去る。反対側へ、静馬・徳右衛門・忠兵衛が去る。

同じ日の深夜、菊池一座の掛け小屋の楽屋。千鶴がやってくる。座り込んで、泣く。後から、鯉之丞と竜蔵がやってくる。

竜蔵　どうしたんだよ、千鶴。誰かに苛められたのか？
鯉之丞　放っとけ、竜蔵。甘やかして、居つかれちゃ、困るからな。
竜蔵　親方には情けってもんがねえのかよ。
鯉之丞　馬鹿馬鹿しい。情けで腹が膨れるか？　千鶴、泊まっていく気なら、銭を払え。
竜蔵　クソー！　千鶴、こんな所にいないで帰れ。俺が送ってってやるから。
千鶴　あの家には帰れない。親方、私を一座に戻らせて。

そこへ、すずめがやってくる。

すずめ　千鶴ちゃん。お兄さんが迎えに来たよ。
千鶴　私はいないってことにして。
すずめ　駄目だよ。もう、いるって言っちゃったし。
竜蔵　馬鹿だな、おまえは。（千鶴に）ひょっとして、そいつに何かされたのか？
千鶴　違う。ただ、会いたくないだけ。（すずめに）とにかく帰ってもらって。

千鶴が去る。

すずめ　どうしよう、親方。
鯉之丞　仕方ねえ。話を聞いてみるか。中へお呼びしろ。

すずめ　（奥に向かって）どうぞ、入ってください。

そこへ、啓一郎がやってくる。

啓一郎　千鶴は？

鯉之丞　奥の部屋にいます。一体、何があったんですか。千鶴のヤツ、何を聞いても、泣いてばかりで。

啓一郎　千鶴と私の友人との間で、行き違いがあったんだ。千鶴が友人に、あらぬ疑いをかけて。

すずめ　何ですか？　あらぬ疑いって。

啓一郎　悪いが、言えない。しかし、それは根も葉もない話で、だから、俺は千鶴をきつく叱ってしまった。

すずめ　どうして根も葉もないって決めつけるんですか？　千鶴ちゃんにだって、何か理由があったはずですよ。

啓一郎　俺もそう思う。だから、こうやって来たんだ。千鶴に会わせてくれないか。

竜蔵　千鶴はおまえの顔なんか二度と見たくねえとよ。

鯉之丞　そこまでは言ってねえだろう。

啓一郎　いや、そう言われても、仕方ない。千鶴は、寄り道のできない娘だ。一度、こうと決めたら、まっしぐらに突き進む。それはよくわかっているつもりだったのに、俺は千鶴を責めることしかしなかった。だから、千鶴に謝りたいんだ。

鯉之丞　（奥に向かって）千鶴、出てこい。千鶴。

啓一郎　（奥に向かって）千鶴、さっきは俺が悪かった。頼むから、俺と帰ってくれ。

おまえが帰らなければ、母上が悲しむ。千鶴。
今は無理ですよ。明日の朝になったら、帰らせますから。
すずめ　頼む。（奥に向かって）千鶴、待ってるからな。
啓一郎　首に縄を巻いてでも、連れていきますよ。どうか、ご安心を。
鯉之丞

啓一郎と鯉之丞が去る。反対側から、千鶴がやってくる

すずめ　千鶴ちゃん、意地を張ってないで、帰ったら？
千鶴　もう、兄上には会えない。会っちゃいけないの。
すずめ　どうして。
千鶴　気付いたのよ。私は心のどこかで、父上がいなくなればいいと思ってた。私は私が許せない。絶対に。

千鶴・竜蔵・すずめが去る。

五月十六日夜、青柳家。りく・忠兵衛がやってくる。

りく　奥様、忠兵衛殿がお戻りになりました。

反対側から、満寿江がやってくる。

満寿江　待ちかねましたよ、忠兵衛。おや？　千鶴は？

忠兵衛　面目ございません。千鶴様はお戻りにならないそうです。

満寿江　千鶴本人がそう言ったのですか？

忠兵衛　いいえ、千鶴様と一緒に芸をしておりました、すずめという娘が。私は本人に会わせてくれと言ったのですが、どうしても聞いてくれなくて。

りく　奥様、人選をお間違えになりましたね。やはり、私が行くべきでした。

忠兵衛　おまえが行っても、結果は同じだ。

満寿江　忠兵衛、千鶴は元気にしているのでしょうか。病気になどなっていないでしょうね。

忠兵衛　忘れておりました。千鶴様から、手紙をお預かりしています。（と手紙を差し出す）

満寿江　（手紙を取って）なぜ最初に言わないのです。（と手紙を広げる）

りく　（手紙を見て）確かに、千鶴様が書いたものですね。文字が紙からはみ出しています。

満寿江　（手紙を読む）「父上様、母上様、兄上様、この度は勝手な振舞いをして、申し訳ありませんでした。千鶴は元の芸人に戻ります。一年間、本当にお世話になりました。最後に、一つだけお願いがあります。宇佐見静馬様には決して気をお許しになりませんように。かしこ」

忠兵衛　わからない。なぜここまで、静馬様をお疑いになるのだ。

りく　静馬様に何かされたのかもしれません。たとえば、付け文を渡されたとか。

忠兵衛　静馬様はまじめなお方だ。そんな破廉恥な真似は絶対にしない。

満寿江　忠兵衛、私を掛け小屋に案内してください。

忠兵衛　奥様、それはいけません。奥様があのような場所にいらっしゃったら、旦那様の顔に泥を塗ることになります。

満寿江　あんな顔、泥だらけになればいいんです。私は千鶴に会いたい。会って、帰ってこいと言いたいのです。

そこへ、啓一郎と徳右衛門がやってくる。

徳右衛門　あんな顔とはひどい言われようだな。

りく　お帰りなさいませ。

満寿江　（徳右衛門に）おまえ様、私が掛け小屋に行くことをお許しください。

徳右衛門　駄目だ。千鶴のことは放っておけと言ったはずだ。

満寿江　この手紙を見てください。（と手紙を徳右衛門に渡して）千鶴は芸人に戻ると言っています。放っておいたら、二度と会えなくなります。

徳右衛門　千鶴は静馬に怪我を負わせた。静馬が水に流してくれたから、表沙汰にはならなかったが、決して許されることではない。千鶴もそれがわかっているから、一座へ戻ったのだ。（と手紙を啓一郎に渡す）

満寿江　私は千鶴を失いたくありません。

徳右衛門　諦めろ。千鶴はもう青柳家の人間ではないのだ。

満寿江　いいえ、千鶴は今でも私の娘です。娘を失うのは、一度だけでたくさんです。さあ、忠兵衛。（と歩き出す）

啓一郎　お待ちください、母上。

満寿江　啓一郎、あなたも一緒に行ってくれるのですか？

啓一郎　今行っても、千鶴は帰ると言わないでしょう。私には別の考えがあります。

満寿江　別の考え？

啓一郎　（満寿江に手紙を示して）千鶴はまだ静馬を疑っています。自分のしたことは間違ってないと思っているのです。静馬への疑いが晴れない限り、この家に戻るとは思えません。

徳右衛門　しかし、どうやって疑いを晴らす。千鶴は頭から決めてかかっているのだ。

啓一郎　一つだけ方法があります。小助川様と住田様を襲った者を捕えるのです。

りく　近頃、夜、お出かけになるのは、そのためだったのですか？

啓一郎　そうだ。千鶴が出ていってから十日間、私は毎日、無外流の使い手に会ってきた。会って、右肩を見せてもらってきた。

徳右衛門　それで、誰か怪しい者はいたのか。

啓一郎　今のところはまだ。しかし、必ず見つけ出します。（満寿江に）千鶴の疑いを必ず晴らしてみせます。

徳右衛門　そこまでして、千鶴を取り戻したいのか。しかし、千鶴はおまえの友人を斬

ったのだぞ。そんな娘が許せるのか。

啓一郎　千鶴は私の妹です。許すも許さないもありません。

徳右衛門　しかし――

忠兵衛　お待ちください、旦那様。

徳右衛門　おまえは横から口を出すな。

忠兵衛　申し訳ございません。しかし、今、裏庭の方で物音が。

りく　私にも聞こえました。ひょっとして、千鶴様が戻っていらっしゃったのでは？

満寿江　私が見てきます。（と歩き出す）

啓一郎　お待ちください、母上。千鶴だったら、玄関から入ってくるはずです。私が見て参ります。

忠兵衛　私も参ります。

啓一郎・忠兵衛が去る。

満寿江　千鶴でないとすると、もしかして、刺客でしょうか。

徳右衛門　まさか。いくらなんでも、自宅まで襲ってはは来ないだろう。

りく　しかし、赤穂浪士は吉良上野介の自宅を襲いました。

徳右衛門　私と吉良を一緒にするな。私も見てくる。おまえたちはここで待っていろ。

徳右衛門が去る。後を追って、満寿江・りくが去る。

五月十六日夜、青柳家の裏庭。啓一郎・忠兵衛がやってくる。

啓一郎　誰かそこにいるのか。
忠兵衛　いるのはわかってるんだ。おとなしく出てこい！

反対側から、鉄之助がやってくる。頭と左手に布を巻いている。

鉄之助　啓一郎、俺だ。（と座り込む）
啓一郎　（鉄之助に駆け寄って）鉄之助、どうしたんだ、その傷は。
鉄之助　気にするな。俺はおまえに話があって来たんだ。
忠兵衛　話の前に、手当てをしましょう。中にお入りください。
鉄之助　時間がないんだ。話が済んだら、俺はすぐに出ていく。

そこへ、徳右衛門がやってくる。

徳右衛門　鉄之助、お主だったのか。
鉄之助　申し訳ありません。勝手に裏から入って。
徳右衛門　誰かに追われているのか？

鉄之助　わかりません。しかし、私がここで捕まったら、徳右衛門殿にご迷惑がかかるので。

啓一郎　迷惑とは何だ。おまえは一体何をしたんだ。

鉄之助　土屋様を斬った。

忠兵衛　土屋様と言いますと、勘定組の？

鉄之助　そうだ。小助川様の補佐をなさっていた方だ。

啓一郎　その傷は土屋様に斬られたのか？　おまえは土屋様と斬り合いをしたのか？

徳右衛門　落ち着け、啓一郎。鉄之助、最初からわかるように話してみろ。

鉄之助　事の起こりは帳簿です。私は十日ほど前から、普請組の帳簿を調べ始めたのです。

啓一郎　小助川様が亡くなる直前に、調べておられた帳簿か。

鉄之助　あの時、おかしな数字があると言っただろう。それは、地震の復興工事の見積もりだ。材料費も人件費も、相場より少しずつ高くなっていた。

徳右衛門　あの工事は、規模が大きく、かつ急がねばならなかった。相場より高くなるのは、致し方あるまい。

鉄之助　確かにそうです。しかし、私は念のために、相場で見積もりを立ててみました。すると、工事全体で、三千両も安い額になったんです。

啓一郎　誰かがその三千両を懐に入れたと言うのか？

鉄之助　たぶんな。おそらく、小助川様も、俺と同じように考えた。そして、不正を表沙汰にしようとして、殺されたんだ。

忠兵衛　もしかして、普請奉行の住田様も？

鉄之助　不正は普請組で行われたんだぞ。当然、小助川様から事実を聞かされていたはずだ。

徳右衛門　なぜ最初に私に言ってくれなかったのか。鉄之助、お主もだぞ。
鉄之助　あまりに事が重大で、もっと証拠を集めてからと思ったんです。それで、私は土屋様にご相談することにしました。土屋様は私と同じ、改革派なので。
啓一郎　それで、なぜ斬り合いになったんだ。
鉄之助　半時ほど前、俺は土屋様の役宅に行った。帳簿を示して、これからどうすればいいか、尋ねた。土屋様は、後は俺に任せろと仰った。ところが、俺が帰ろうとした途端、後ろから斬りかかってきたんだ。
忠兵衛　土屋様がいきなり？
鉄之助　とっさに避けたが、腕を斬られた。土屋様はなおも斬りかかってくる。俺は刀を抜いて、応戦した。無我夢中で刀を振り回した。気づいた時には、土屋様が足元に倒れていた。
徳右衛門　亡くなったのか？
鉄之助　わかりません。確かめようとしたところへ、女中が来たので。私は慌てて庭に飛び出したのです。
忠兵衛　不正を行っていたのは、土屋様だったのでしょうか。
啓一郎　俺は間違いないと思う。ただし、誰かに操られたのだろうが。
徳右衛門　佐野様だ。あの工事の指揮を執っていたのは、佐野様だった。
忠兵衛　（鉄之助に）しかし、土屋様は保守派ではないのでしょう？
鉄之助　俺もそう思ったから、相談したんだ。しかし、裏では佐野様に繋がっていたらしい。
徳右衛門　それで、お主はこれからどうするつもりだ。
鉄之助　江戸へ行きます。追手に捕まる前に。
啓一郎　おまえに罪はない。先に斬りかかってきたのは、土屋様の方だろう。

鉄之助　しかし、証拠が何もない。今、捕まったら、俺は間違いなく切腹になる。目付の役人は皆、保守派だからな。

啓一郎　父上、父上のお力で、鉄之助を助けることはできませんか。不正を暴けば、佐野様を失脚させることも可能なのでは。

徳右衛門　そのためには、証拠が必要だ。鉄之助、帳簿は今、どこにある。

鉄之助　土屋様の役宅です。斬り合いをして、そのまま置いてきてしまいました。

徳右衛門　今頃は、佐野様の手に渡っているかもしれんな。しかし、私にできるだけのことはしよう。

鉄之助　ありがとうございます。（啓一郎に）江戸へ行く前に、どうしてもおまえに話しておきたかった。話せてよかった。

啓一郎　江戸へなど行くな。身の証が立つまで、この家に隠れていろ。

鉄之助　これ以上、迷惑をかけたくない。徳右衛門殿、お邪魔致しました。

そこへ、満寿江とりくがやってくる

満寿江　お待ちなさいませ、鉄之助殿。

徳右衛門　満寿江、中にいろと言ったはずだぞ。

満寿江　鉄之助殿の声が聞こえたものですから。鉄之助殿、春衣さんに何かお伝えすることはありませんか。

鉄之助　一つだけ、お願いします。私のことは忘れてくれと。

啓一郎　まさか、二度と小田原に戻らないつもりか。

鉄之助　少なくとも、佐野様がいる間は、無理だ。春衣さんをいつまでも待たせるわけには行かない。

啓一郎　しかし、おまえは春衣さんと夫婦になる約束をしたんだろう。
鉄之助　残念だが、あの約束はなしだ。春衣さんのためにも、その方がいいんだ。
啓一郎　だったら、直接、春衣さんにそう言え。それがせめてもの罪滅ぼしだ。
鉄之助　俺だって、そうしたい。しかし……。
啓一郎　わかった。俺がここに連れてくる。すぐに戻るから、待っていろ。
鉄之助　しかし、おまえが戻る前に、追手が来たら。
満寿江　それならば、別の場所で会えばいいではありませんか。
徳右衛門　別の場所とは。
満寿江　千鶴の所です。あそこなら、追手も来ないでしょう。
りく　それはとても良いお考え。千鶴様なら、きっと力を貸してくれるはずです。
啓一郎　忠兵衛、鉄之助を案内してやってくれ。俺は春衣さんの家に行く。
忠兵衛　承知致しました。鉄之助様、我々は裏から参りましょう。

全員が去る。

五月十六日夜、宇佐見家。静馬と勝太郎がやってくる。二人とも、頭に鉢金を巻き、襷を掛けている。

静馬　春衣！　春衣！

反対側から、春衣と啓一郎がやってくる。

春衣　お帰りなさいませ、兄上。
静馬　啓一郎、なぜおまえがここにいる。
啓一郎　春衣さんに用があって来たんだ。それより、その恰好は何だ。
勝太郎　鉄之助さんの話は聞きましたか？
啓一郎　ああ。
勝太郎　だったら、話が早い。今し方、道場に目付の役人が来ましてね。静馬さんは追手に命じられたんですよ。
春衣　兄上が追手に？
勝太郎　で、俺も手伝うことにしたんです。鉄之助さんはうちの道場の名前に傷をつけた。見過ごすわけには行きません。
啓一郎　勝さん、鉄之助に悪気はなかったんだ。

勝太郎　悪気のない人間が、後ろから斬りかかりますか？
啓一郎　一体誰がそんなことを。
勝太郎　土屋ですよ。駆けつけた役人に、そう証言したんです。
啓一郎　それじゃ、土屋様はご無事だったのか？
勝太郎　手当てが早かったせいで、何とか持ちこたえたそうです。
静馬　（啓一郎に）それで、春衣に用というのは何だ。
春衣　兄上、啓一郎様は｜｜｜
啓一郎　（静馬に）俺は鉄之助のことが心配で、ひょっとしたら、春衣さんの所に来てるんじゃないかと思って。
勝太郎　俺たちも同じですよ。鉄之助さんは春衣さんにぞっこんだ。藩の外に逃げるにしても、春衣さんに一目会ってからにするんじゃないかと思いましてね。
静馬　春衣、鉄之助はここに来たのか。
啓一郎　いや、まだ来てないそうだ。
静馬　俺は春衣に聞いたんだ。（春衣に）なぜさっきから黙っている。
勝太郎　まさか。
静馬　勝さん、奥を見てきてくれ。俺は裏の畑に行く。

静馬と勝太郎が去る。

春衣　なぜ本当のことを仰らなかったのですか？
啓一郎　静馬はともかく、勝さんは頭に血が昇っている。何を言っても、信じてはくれません。春衣さん、今のうちに、掛け小屋に行ってください。
春衣　啓一郎様は？

啓一郎　俺はあの二人をここに引き止めます。さあ、早く。
春衣　啓一郎様、鉄之助様を信じてくださって、ありがとうございました。

春衣が去る。反対側から、静馬と勝太郎がやってくる。

静馬　啓一郎、春衣はどこへ行った。
啓一郎　俺の家だ。母上に伝言を頼んだんだ。俺も静馬の手伝いをする、だから、帰りは遅くなると。
勝太郎　こんな夜中に、一人で行かせたんですか？
啓一郎　（静馬に）勝手なことをして、すまなかった。しかし、俺は一刻も早く、鉄之助を見つけたくて。
静馬　下手な嘘はやめろ。おまえは鉄之助の居場所を知っている。ここに来たのは、それを春衣に伝えるためだ。
啓一郎　違う。
勝太郎　あなたは鉄之助さんを逃がすつもりなんですか？　そんなことをしたら、あなたも同罪ですよ。
啓一郎　今、捕まったら、鉄之助は腹を切らされる。
勝太郎　仕方ありませんよ。人を殺めた報いです。
啓一郎　待てよ、勝さん。土屋様はご無事だったんじゃないのか？
勝太郎　知らないんですか？　鉄之助さんには、お奉行方を襲った疑いもかかってるんです。
啓一郎　馬鹿な。鉄之助がそんなことをするはずがない。
勝太郎　金ですよ。鉄之助さんは、金のためにやったんです。

啓一郎　勝さん、言いがかりにも程があるぞ。

静馬　残念だが、証拠があるんだ。目付の役人が、鉄之助の部屋から、百両を見つけた。そんな大金を、なぜあいつが持っている。

勝太郎　（啓一郎に）決まってるでしょう？　誰かにもらったんですよ。お奉行方を襲う報酬として。

啓一郎　馬鹿馬鹿しい。鉄之助が、金のために人を殺すと思うか？

勝太郎　じゃ、他にどんな理由があるんです。道端で拾ったとでも言うつもりですか？

静馬　啓一郎、おまえが鉄之助を信じたい気持ちはわかる。俺だって、あいつとは藩校の頃からの付き合いだ。あいつの人の良さは、よくわかっている。

啓一郎　だったら、なぜ信じてやらない。

静馬　逆だ、啓一郎。信じてもらいたかったら、なぜこそこそ逃げ回る。なぜ堂々と無実を主張しない。

啓一郎　そうしたくても、できないからだ。聞いてくれ、静馬。確かに、鉄之助は土屋様を斬った。しかし、最初に斬りかかってきたのは、土屋様の方なんだ。

静馬　鉄之助がそう言ったのか。

啓一郎　ああ。鉄之助は、普請組の帳簿の中から不正を発見したんだ。土屋様の所へ行ったのは、これからどうすべきか、相談するためで。

勝太郎　そんな話を信じたんですか？　じゃ、鉄之助さんの部屋で見つかった百両は、どう説明するんです。

啓一郎　誰かが仕組んだとは考えられないか。鉄之助を陥れるために。

勝太郎　誰かって、誰です。

啓一郎　佐野様だ。佐野様は、自分の罪を鉄之助に被せようとして――――

勝太郎　本気で言ってるんですか？　筆頭家老がなぜお奉行方を殺すんです。

静馬　いや、啓一郎の言うことにも一理ある。殺されたお奉行方は、お二人とも改革派だ。佐野様が裏で糸を引いていたということも、十分に考えられる。

勝太郎　俺には信じられませんね。

静馬　啓一郎、鉄之助の所に案内してくれ。

啓一郎　逃がしてくれるのか。

静馬　俺も鉄之助に会って、話が聞きたい。逃がすかどうかは、その後だ。

勝太郎　静馬さん、俺は反対です。

静馬　勝さん、頼む。鉄之助の話を聞いてやってくれ。（と頭を下げる）

勝太郎　わかりましたよ。

啓一郎　恩に切るぞ、静馬。

静馬　おまえのためじゃない。春衣のためだ。

三人が去る。

五月十六日夜、菊池一座の掛け小屋の楽屋。竜蔵がやってくる。反対側から、千鶴・鯉之丞・すずめがやってくる。

千鶴　どうだった、竜蔵？
竜蔵　大丈夫だ。境内をぐるっと回ってきたが、人っ子一人、いやしねえ。
千鶴　ご苦労様。悪いけど、表で見張りをしててくれる？
竜蔵　任せとけ。（と行こうとする）
鯉之丞　ちょっと待て。千鶴、見張りが必要だと言うなら、おまえがやれ。一座の人間を使うことは許さねえ。
すずめ　どうしてよ。
鯉之丞　わからねえのか。今、奥にいるのは咎人だ。咎人を助けたことがバレてみろ。すぐに打ち首だ。
千鶴　鉄之助様は、何も悪いことはしてない。
鯉之丞　だったら、なぜここへ逃げてきた。竜蔵もすずめも、よく聞け。あの侍は、千鶴が勝手に匿った。俺たちは何も知らなかった。役人に調べられたら、そう答えるんだ。
竜蔵　俺に嘘をつけって言うのか？
鯉之丞　死にたくなかったら、そうしろ。それがおまえのためだ。

そこへ、鉄之助がやってくる。後を追って、春衣がやってくる。

鉄之助　千鶴さん、迷惑をかけてすまなかった。
千鶴　お話は終わったんですか？
鉄之助　ああ。迷惑ついでに、もう一つ、頼みたい。春衣さんを家まで送り届けてほしいんだ。
春衣　私は帰りません。鉄之助様と一緒に行きます。
鉄之助　お気持ちはうれしいが、それは無理です。江戸へ行く道はすべて封鎖されているはず。俺はこれから、山を越えなければならない。
春衣　山ぐらい平気です。たとえ這ってでも、ついていきます。
鉄之助　駄目です。あなたとは、ここでお別れするしかないんです。
鯉之丞　申し訳ありません。痴話喧嘩なら、よそでやっていただけませんか。
すずめ　黙ってろ、クソジジイ。
鯉之丞　何だと？
すずめ　私たちは何も知らないんだろう。それなのに、なんで口出しができるんだい。
鯉之丞　……。
竜蔵　すげえ。親方を黙らせた。
すずめ　（鉄之助に）すみませんでした、邪魔をして。どうぞ、お話の続きを。
鉄之助　春衣さん、聞いてください。今の俺には金がない。あなたを江戸に連れていっても、ろくな暮らしをさせてあげられないんです。
春衣　構いません。鉄之助様と一緒にいられるなら。
鉄之助　俺はあなたに幸せになってほしい。俺のことは忘れてください。

春衣　いやです。それだけは絶対にいやです。

そこへ、啓一郎がやってくる。

啓一郎　鉄之助、話がある。

鉄之助　何かあったのか。

啓一郎　土屋様はご無事だそうだ。しかし、おまえが先に斬りかかったと証言しているらしい。おまけに、おまえの部屋で、百両の金が見つかった。目付の役人は、おまえが金のためにやったと考えている。土屋様だけじゃない。小助川様と住田様もだ。

鉄之助　冗談じゃない。なぜ俺が小助川様まで。

啓一郎　もちろん、俺はおまえを信じる。必ず江戸へ逃がしてみせる。しかし、手助けをする人間は、一人でも多い方がいい。

鉄之助　俺がここにいることを、誰かに話したのか？

啓一郎　静馬と勝さんが、今、そこまで来ている。

千鶴　待ってください。静馬様も若先生も、追手ではなかったのですか。

啓一郎　お役目より鉄之助を選んだんだ。静馬は、春衣さんのためだと言っていたが。

千鶴　私には信じられません。口だけなら、何とでも言えます。

啓一郎　また、静馬を疑うつもりか。

千鶴　私だって、疑いたくはありません。静馬様は兄上の大切なご友人です。春衣さんの、たった一人のお兄様です。

啓一郎　だったら、なぜ。

すずめ　理由なんか、どうでもいいじゃない。一度ぐらい、千鶴ちゃんを信じてあげ

てよ。

そこへ、静馬と勝太郎がやってくる。

勝太郎　いつまで待たせるんですか、啓一郎さん。

千鶴　鉄之助様、逃げてください。

勝太郎　人聞きの悪いことを言わないでくださいよ。まるで、俺たちが鉄之助さんを斬りに来たみたいじゃないですか。

春衣　兄上、鉄之助様を逃がしてくださるんですよね？　啓一郎様に仰ったことは、嘘ではありませんよね？

静馬　おまえは口を出すな。今すぐ、家に戻れ。

春衣　いいえ、戻りません。私は鉄之助様の妻になる身です。鉄之助様が江戸へ行くなら、私も一緒に行きます。

勝太郎　今、なんて言いました？　あなたも一緒に行く？

静馬　鉄之助、おまえがそうしろと言ったのか。

春衣　違います。鉄之助様は駄目だと――

静馬　（鉄之助に）春衣をここに呼んだのは、そのためか。別れを告げるためでなくて、道連れにするためだったのか。

啓一郎　俺が鉄之助に言ったんだ。春衣さんに会ってから行けと。

勝太郎　春衣さん、わかってるんですか？　鉄之助さんについていったら、あなたも同罪だ。その責めは、静馬さんが負うことになるんですよ。

啓一郎　（春衣に）勝さんの言う通りだ。あなたはここで、鉄之助を見送るんだ。さあ、鉄之助。

静馬　待て、啓一郎。鉄之助は城に連れていく。
啓一郎　何を言うんだ。おまえはさっき――
静馬　逃がすかどうかは、話を聞いてから決めると言ったはずだ。
千鶴　本当ですか？　最初から、逃がす気なんかなかったんじゃないですか？
勝太郎　鉄之助さん、おとなしく捕まってください。あなたと斬り合いはしたくない。あなただって、俺たちに勝てるとは思わないでしょう。
鉄之助　それはやってみなければ、わからない。
勝太郎　馬鹿馬鹿しい。やるだけ、無駄ですよ。
鉄之助　無実の罪で腹を切らされるぐらいなら、ここで戦って死ぬ。（と刀を抜く）
静馬　わかった。相手をしてやろう。
啓一郎　やめろ、静馬。鉄之助も刀をしまえ。
春衣　兄上、一生のお願いです。見逃してください。
静馬　目を覚ませ、春衣。鉄之助には、おまえが庇う価値などひとかけらもない。
鯉之丞　お侍様、こんな所で斬り合いはよしてくださいよ。
静馬　怪我をしたくなかったら、外へ出ろ。（と刀を抜いて）今すぐにだ。
鯉之丞　（竜蔵とすずめに）おまえら、こっちに来い。千鶴もだ。
千鶴　静馬様、やめてください。
静馬　おまえはもう関係ない。行くぞ、鉄之助。

静馬が鉄之助に斬りかかる。鉄之助がかわす。鯉之丞・竜蔵・すずめが去る。啓一郎が二人の間に入る。

啓一郎　やめろ、静馬！

静馬　引っ込んでろ。

勝太郎が鉄之助に斬りかかる。鉄之助がかわす。勝太郎がさらに鉄之助に斬りかかる。
啓一郎が勝太郎の剣を払う。静馬が鉄之助の右足を斬る。鉄之助が跪く。

春衣　鉄之助様！

静馬が鉄之助に斬りかかる。勝太郎が静馬の剣を払う。

勝太郎　勝負はついた。鉄之助さん、刀を預かりますよ。（と刀を取る）
静馬　（鉄之助に）立て。
啓一郎　教えてくれ、静馬。おまえは俺を騙したのか。
静馬　騙すとは？
啓一郎　俺にここへ案内させたのは、鉄之助を捕えるためか。話を聞く気など、最初からなかったのか。
勝太郎　甘いな、啓一郎さんは。今頃、気づいたんですか？
啓一郎　なぜなんだ、静馬。
静馬　俺はご家老のご子息じゃない。六十石の平侍だ。勝手に役目を捨てられると思うか？

鉄之助を連れて、静馬と勝太郎が去る。

春衣　待ってください、兄上！

啓一郎　追っても、無駄だ。静馬も勝さんも、聞く耳を持たない。
春衣　でも、このままお城へ連れていかれたら、鉄之助様の命はありません。
啓一郎　諦めるのはまだ早い。裁きが始まるまでに、お奉行方を襲ったヤツを見つけ出せば。
千鶴　まだわからないんですか、兄上。
啓一郎　おまえは黙ってろ。
千鶴　今、その目で見たでしょう。静馬様は鉄之助様を斬ろうとした。自分の手で鉄之助様の口を塞ごうとしたんです。それは何のためですか？　自分がしたことを、すべて鉄之助様のせいにするためでしょう？
春衣　まさか、兄上は城へ行く前に？
千鶴　鉄之助様が逃げようとしたと言えば、言い訳が立ちます。
啓一郎　静馬なのか？　何から何まで、静馬のやったことなのか？
千鶴　（頷く）

啓一郎が去る。反対側から、鯉之丞・竜蔵・すずめがやってくる。

竜蔵　結局、千鶴の言った通りだったじゃねえか。今頃、気づいても、遅いぜ。
春衣　ここに刀はありませんか？
すずめ　まさか、あなたも行くつもりですか？
春衣　このまま鉄之助様を見殺しにはできません。私はあの人なしでは生きていけません。死ぬ時は一緒です。
千鶴　わかりました。私が行きます。
春衣　千鶴さんが？

千鶴　私だって、あの人なしでは生きていけません。そのことに、やっと気づいたんです。

鯉之丞　千鶴、持っていけ。（と大刀を差し出す）

竜蔵　いつの間に。

鯉之丞　（千鶴に）死ぬなよ。

千鶴　大丈夫。親方、春衣さんをお願い。

千鶴が去る。

竜蔵　よし、俺も行くぜ。

すずめ　馬鹿ね。竜ちゃんが行ったって、何の役にも立たないよ。

鯉之丞　（竜蔵に）おまえは春衣様を家までお送りしろ。さあ、春衣様。

春衣が両手が顔を覆って、泣き出す。春衣・鯉之丞・竜蔵・すずめが去る。

五月十六日夜、森の中。静馬・鉄之助・勝太郎がやってくる。勝太郎は提灯を持ち、静馬は鉄之助の大刀を持っている。

勝太郎　静馬さん、どこへ行く気ですか？　この道だと、遠回りじゃないかな。
静馬　鉄之助に最後の機会をやろう。
勝太郎　最後の機会って？
静馬　（鉄之助に大刀を差し出して）ここで俺と勝負しろ。おまえが勝ったら、江戸でもどこでも、好きな所へ行くがいい。
勝太郎　待ってくださいよ。裁きを受けさせるんじゃなかったんですか？
静馬　（鉄之助に）どうする。やるのか、やらないのか。
鉄之助　どうしても、俺が殺したいようだな。
静馬　無理にとは言わない。おまえが決めろ。（と大刀を地面に置く）
勝太郎　静馬さん、いくら何でも、やりすぎだ。
静馬　勝さんはさっき、なんて言った。鉄之助は道場の名前に傷をつけた、見過ごすわけには行かないと言ったよな？
勝太郎　鉄之助さんはすぐに切腹になる。俺が手を下すまでもない。
静馬　本当にそうなると、言い切れるか？　啓一郎の親父には力がある。証拠が不十分だの何だのと文句をつけて、すべてを不問に伏すかもしれない。

勝太郎　だからって、無抵抗な人間を斬ろうとは思わない。
静馬　勝さんも甘いな。鉄之助が、俺におめおめと斬られるものか。

静馬が刀を抜き、鉄之助に斬りかかる。鉄之助が地面から刀を取り、静馬の剣を受ける。
静馬がさらに斬りかかる。鉄之助がかわして、刀を抜く。鉄之助が静馬に斬りかかる。
静馬がかわして、鉄之助に斬りかかる。そこへ、啓一郎が走ってくる。

啓一郎　やめろ、静馬！
勝太郎　いいところに来てくれましたね。啓一郎さんも静馬さんを止めてくださいよ。この人、鉄之助さんを殺さないと、気が済まないみたいで。
静馬　こいつは春衣を裏切った。春衣を幸せにする気などなかったんだ。
鉄之助　それは誤解だ。俺はいつも春衣さんのことを――
静馬　だったら、なぜお奉行方を斬った。金に目が眩んだのか。金さえあれば、春衣が喜ぶとでも思ったのか。
啓一郎　そうやって、鉄之助に罪を被せるつもりか。
静馬　何だと？
啓一郎　俺は、今日までおまえを信じていた。しかし、おまえは役目のために俺を騙した。それで、やっと気が付いたんだ。十日前、千鶴の言っていたことは正しかった。俺はおまえでなく、千鶴を信じるべきだったんだ。
静馬　驚いたな。子供の頃からの親友より、芸人上がりの娘を信じるのか。
啓一郎　鉄之助、肩を見せてみろ。住田様の護衛は、襲ってきた相手を斬った。おまえが下手人なら、傷が残っているはずだ。

静馬が鉄之助に斬りかかる。鉄之助が啓一郎を突き飛ばして、静馬に斬りかかる。静馬がかわして、鉄之助に斬りかかる。啓一郎が静馬の剣を払う。静馬が啓一郎に斬りかかる。啓一郎がかわす。勝太郎が啓一郎と静馬の間に立つ。

勝太郎　静馬さん、落ち着いてください。啓一郎さんまで斬るつもりですか？

静馬　そいつが、なぜ鉄之助を庇うと思う。鉄之助に金を渡したのが、自分の父親だからだ。不正を行っていたのは、青柳徳右衛門なんだ。

啓一郎　やめろ、静馬。父上を侮辱することは許さない。

静馬　勝さんはどっちを信じる。俺か、啓一郎か。

勝太郎　なるほどね。やっと納得できました。おかしいと思ってたんですよ。鉄之助さんが静馬さんに勝つなんて。

静馬　何を言ってる。

勝太郎　あなたはあの時、怪我をしていた。住田の護衛に右肩を斬られて。だから、勝負するのをいやがったんだ。

静馬　違う。あの日は、前の晩に酒を飲みすぎて———

勝太郎　嘘はもう結構ですよ。静馬さん、悪いけど、俺はあんたと手を切る。啓一郎さんと鉄之助さんの方につきますよ。

静馬　勝さん。

勝太郎　うちの道場の名前に傷をつけたのは、あなただ。しかし、殺しはしませんよ。城に連れていって、裁きを受けてもらいます。

静馬が勝太郎に斬りかかる。勝太郎がかわして、静馬の腕を押さえる。

勝太郎　　もうやめましょう、静馬さん。

静馬が勝太郎を突き飛ばす。勝太郎が刀を抜いて、静馬に斬りかかろうとする。静馬が地面の砂を掬って、勝太郎の顔に投げつける。勝太郎が目を押さえる。静馬が勝太郎の右腕を斬る。

啓一郎　　勝さん！

啓一郎が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、啓一郎に斬りかかる。啓一郎がかわす。そこへ、千鶴が走ってくる。

千鶴　　兄上！

千鶴が刀を抜いて、静馬に斬りかかる。静馬がかわす。千鶴が啓一郎の前に立つ。

静馬　　（千鶴に）邪魔だ、どけ。

静馬が千鶴に斬りかかる。千鶴がかわす。啓一郎が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、啓一郎に斬りかかる。啓一郎がかわす。千鶴が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、啓一郎の左手を斬る。啓一郎が跪く。千鶴が静馬に斬りかかる。静馬が千鶴の剣を受けて、斬り返す。千鶴が静馬の剣を受けて、跪く。

啓一郎　　鉄之助、明かりを消せ。早く！

鉄之助が提灯の火を吹き消す。周囲が暗闇に包まれる。

啓一郎　静馬、諦めろ。闇の中なら、千鶴の方が上だ。

静馬　笑わせるな。旅芸人のいかさま剣法が何程の物だ。

千鶴が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、千鶴に斬りかかる。千鶴がかわす。

鉄之助　やめろ、静馬。おまえは俺が斬りたいんじゃなかったのか。

静馬　馬鹿め。おまえら全員、ここから生きて帰れると思うな。

勝太郎　こっちは四人もいるんですよ。いくら殺しに慣れたあなただって、勝ち目はない。

静馬　減らず口を叩くな。その腕で、どうやって剣を振る。

啓一郎　なぜだ、静馬。なぜお奉行方を斬った。やはり、金のためか。

静馬　おまえにはわかるまい。六十石の平侍の辛さが。佐野様は金など一銭もくださりはしなかった。命令に従わなければ、藩から追い出す。そう仰っただけだ。

啓一郎　なぜ俺に言ってくれなかった。父上に頼めば、何とか手を打ってくださったはずだ。

静馬　父上、父上、父上。何かと言うと父上だ。いいか、啓一郎、俺はおまえのその甘えた根性が、子供の頃から嫌いだった。おまえが父上と言うたびに、反吐が出そうだった。おまえに頭を下げるぐらいなら、死んだ方がましだ。

千鶴　あなたは兄上を憎んでいたのですか？

静馬が千鶴に斬りかかる。千鶴がかわす。

静馬　あの人が死んだのは、啓一郎のせいだ。それなのに、啓一郎は何をした。顔が似ているというだけで、芸人なんかを引き取って。あの人が死んでから、まだ一年しか経ってなかったのに。

鉄之助　あの人って、季江さんのことか？

勝太郎　（静馬に）どういうことです。啓一郎さんのせいで死んだというのは。

静馬　季江さんに縁談が来た時、俺は二人で江戸に行こうと言ったんだ。しかし、季江さんは駄目だと言った。そんなことをしたら、父上は家老の職を解かれる。弟は一生、無役のままで終わる。そんな目には遇わせられないと。

啓一郎　知らなかった。おまえと姉上は———

静馬　想像もしなかっただろう。俺のような平侍を、季江さんが相手にするなんて、当たり前だ。おまえにとって、俺は虫けらも同然なんだからな。

啓一郎　何が虫けらだ。俺はおまえを親友だと———

静馬　俺は、おまえを友だと思ったことは一度もない。子供の頃からずっと。

千鶴　やっとわかりました。あなたは兄上に嫉妬していたんですね？

静馬が千鶴に斬りかかる。千鶴がかわす。

静馬　俺と啓一郎のどこが違う。藩校の成績も、剣の腕も、勝ったり負けたりの繰り返し。啓一郎にかなわないと思ったことなど、一度もない。しかし、啓一郎にあって、俺にない物が一つだけあった。ご家老様の父上だ。

啓一郎　（笑う）

静馬　何がおかしい。

啓一郎　俺は馬鹿だ。なぜおまえに父上の話をしなかったのか。静馬、メリケンには身分の違いがないそうだ。武士も町人もない。だから、努力次第で、誰でも将軍になれるそうだ。父上は、日本もそんな国にしたいと仰った。そのためには、まず小田原藩から変えていかなければならないと。

静馬　夢みたいな話はやめろ。

啓一郎　夢じゃない。父親がいようといまいと、関係ない。そんな時代がきっと来るんだ。

静馬　黙れ、啓一郎。

啓一郎　今からでも遅くない。もう一度、初めからやり直せ。亡くなった姉上のためにも。

静馬　まだわからないのか、啓一郎。おまえは季江さんの仇なんだ。

静馬が啓一郎に斬りかかる。啓一郎がかわす。千鶴が静馬に斬りかかる。静馬がかわして、千鶴に斬りかかる。千鶴がかわして、静馬の左足を斬る。静馬が地面に膝をつく。

千鶴　動かないでください。動いたら、今度は首を斬ります。

静馬　斬ればいいだろう。裁きを受けても、どうせ切腹だ。

千鶴　本当のことを言えばいいじゃないですか。全部、佐野様に脅されてやったことだと。

静馬　俺は三人も殺した。今さら、手遅れだ。

啓一郎　そんなことはない。おまえはまだ生きている。生きている限り、何度でもや

り直しはできる。そうだろう、千鶴。

千鶴　ええ。

そこへ、忠兵衛がやってくる。忠兵衛は提灯を持っている。

忠兵衛　探しましたよ、啓一郎様。

啓一郎　忠兵衛、迎えに来てくれたのか。

忠兵衛　ええ、それとご報告に。旦那様が目付の役人を動かしまして、例の帳簿を押さえることができたんです。これで、鉄之助様の無実は証明されます。

鉄之助　助かった。これで、春衣さんを残していかずに済んだ。

勝太郎　静馬さん、城へ行きましょう。

忠兵衛　あれ？　よく見たら、皆さん、傷だらけ。ここで、剣術の稽古でもしていたのですか？

鉄之助　ああ、千鶴さんから、闇風を教わってたんだ。まあ、詳しい話は歩きながら。

静馬・鉄之助・勝太郎・忠兵衛が去る。

啓一郎　千鶴、家に帰ってくる気はないか。

千鶴　私が芸人だったことは、鉄之助様にも春衣さんにも知られてしまいました。帰ったら、父上にも母上にもご迷惑が。

啓一郎　そんなことは構うものか。頼む。帰ってきてくれ。（と頭を下げる）

千鶴　兄上。

啓一郎　俺はおまえを信じなかった。謝れというなら、いくらでも謝る。だから、も

う一度、機会をくれ。俺にやり直しをさせてくれ。

千鶴　謝るのは私の方です。勝手に家を飛び出して、申し訳ありませんでした。

千鶴が頭を下げる。泣き出す。啓一郎が千鶴の肩を抱く。二人が去る。

六月三日昼、青柳家。りくがやってくる。反対側から、満寿江・春衣がやってくる。春衣は、枇杷を山盛りにした籠を持っている。

りく　奥様、どちらにいらっしゃっていたんですか？

満寿江　春衣さんと、庭へ。今年の枇杷は出来がいいから、持っていってもらおうと思って。

春衣　（りくに籠を示して）たくさん取っていただきました。

りく　まさか、奥様がお取りになったんですか？　あの木に登られて？

春衣　そうです。とても上手に登られて、びっくりしました。

満寿江　千鶴にコツを教えてもらったんです。りくも一度、登ってみればいいのに。上まで登ると、海が見えるんです。とても気持ちがいいんですよ。

りく　私は結構です。奥様も、どうか危ない真似はおやめください。青柳家の奥様が木登りなど。今、りくは海まで駆けていって、ご冗談をと叫びたい気持ちでいっぱいです。

そこへ、徳右衛門・鉄之助・忠兵衛がやってくる。

徳右衛門　どうした、りく。おまえが大声を出すとは珍しいな。

りく　聞いてください、旦那様。奥様が枇杷を。
徳右衛門　（籠を見て）あ、狡いぞ、満寿江。私に黙って、先に登ったな。
満寿江　ご安心ください。まだたくさん残っていますから。（鉄之助に）お話はもう
鉄之助　お聞きになったのですか？
徳右衛門　驚きました。私のような若輩者が、勘定奉行補佐を仰せつかるとは。皆、徳右衛門殿のお口添えのおかげです。
春衣　私は何もしていない。復興工事の不正を摘発した、お主の力が認められたのだ。
鉄之助　鉄之助様、おめでとうございます。
徳右衛門　ありがとう。しかし、出世すればしたで、責任も重くなる。もう、軽はずみなことはできない。
満寿江　その通りだ。お主には、春衣殿を守るという役目も加わるのだからな。
鉄之助　（鉄之助に）枇杷を食べて、滋養をつけてください。千鶴は毎日、食べています。おかげで、元気溌剌です。
忠兵衛　千鶴さんと啓一郎は今、どこに？
鉄之助　先程、二人でお出かけになりました。たぶん、台場でしょう。この前のお休みの日も、二人で行かれましたから。
徳右衛門　そうですか。（春衣に）どうする。先に、お目付の屋敷へ行くか。
鉄之助　静馬に会いに行くのか。
徳右衛門　はい。あれから毎日、二人で通っています。差し入れを持って。残念ながら、
鉄之助　静馬には会わせてもらえませんが。
徳右衛門　裁きが終わるまでは、誰にも会わせない決まりだからな。
春衣　鉄之助様、この枇杷は、兄上に差し上げてもよろしいですか？

鉄之助　ああ、そうしろ。静馬にも元気になってもらいたい。まだまだ生きてもらいたい。

徳右衛門　それでは、鉄之助の分がなくなるではないか。よし、私が今から取ってこよう。

鉄之助　いや、我々はそろそろお暇致します。徳右衛門殿、これからもご指導をよろしくお願い致します。

春衣　満寿江様、枇杷をありがとうございました。

りく　お見送り致します。

鉄之助・春衣・りく・忠兵衛が去る。

満寿江　おまえ様。佐野様には、何かお咎めはあるのでしょうか。

徳右衛門　ないだろうな。不正は土屋殿が一人で行った。静馬も土屋殿の命令で動いたそれで無理矢理、決着をつけようとしている。致し方あるまい。実際、あの方が関わっていたという証拠は、どこにもないのだから。

満寿江　そんなことが許されていいのでしょうか。私には納得できません。

徳右衛門　私だって同じだ。佐野様には、啓一郎の縁談を断る時、きっぱり言ってやった。貴殿がどれほど邪魔されようとも、私は必ず小田原藩を変える。そして、いつかは日本も変えてみせると。結局、私は口でしか戦えぬ。情けない男だと思うだろうな。

満寿江　いいえ。それがおまえ様の戦い方です。誇りに思っております。

徳右衛門　満寿江、どうだろう。もう一人、啓一郎の妹か弟を。

満寿江　さあ、枇杷を取りに参りましょう。木登りは私がご指導致します。

徳右衛門・満寿江が去る。
海岸。啓一郎がやってくる。後から、千鶴がやってくる。竹筒を持っている。

千鶴　兄上、お水をお持ちしました。
啓一郎　見てみろ、千鶴。海がすっかり夏の色をしている。
千鶴　この前も、同じことを仰っていましたよ。
啓一郎　そうだったか？　子供の頃、夏になると、よくここで泳いだ。鉄之助や静馬と一緒に。たまに、姉上がついてくることもあった。体の調子がいい時だけだったが。その度に、浜木綿の花を摘んでいた。
千鶴　浜木綿？
啓一郎　あそこに、白い蕾が見えるだろう。もうすぐ、一斉に咲くぞ。その時は、また一緒に見に来よう。来年も、そのまた来年も。
千鶴　はい。
啓一郎　十年先も二十年先も、ずっとだぞ。
千鶴　はい。
啓一郎　わかっているのか？　俺は今、おまえに大事なことを言っているんだが。
千鶴　そんなに浜木綿がお好きなんですか。
啓一郎　違う。俺と一緒になってくれと言っているんだ。
千鶴　え？
啓一郎　本当は、この前来た時、言おうとしたんだ。でも、どうしても切り出せなかった。おまえに断られたら、どうしようと思って。
千鶴　（遠くを指して）兄上、大変です。

啓一郎　聞いているのか、千鶴。
千鶴　あそこです。沖の方。煙があんなにたくさん。まさか、火事？
啓一郎　（見て）ああ、あれは火事じゃない。スチムマシンというものだ。
千鶴　スズムシ？
啓一郎　スチムマシン。日本の言葉で言ったら、蒸気機関だ。俺も話には聞いていたが、実際に目にするのは初めてだ。よく見ろ、千鶴、あれが外国の船だ。一つ、二つ、全部で四隻。江戸の方へ向かっているな。急いで、父上にお知らせしなければ。
千鶴　兄上、あの船はどこから来たのですか？
啓一郎　エゲレスか、メリケンか。とにかく、海の向こうの、遠い国からだ。
千鶴　約束しましたよね。いつか一緒に連れていってくださるって。
啓一郎　その話はまた今度だ。千鶴、屋敷に戻るぞ。
千鶴　その日が来るまで、私はずっとおそばにいます。二人で、真っ青な海を越える日まで。
啓一郎　千鶴、今、なんて言った？

千鶴が啓一郎に抱きつく。そこへ、鉄之助と春衣がやってくる。啓一郎が千鶴を引き剥がし、鉄之助と春衣を手招きして、沖を指す。鉄之助と春衣が沖を見つめる。四人の上に、どこまでも真っ青な空が広がっている。

＜幕＞